



圖解

量地指南後編

三

41
726
3



門 2 1
716
卷



量地指南後篇卷之三

勢南 處士 村井昌弘編述

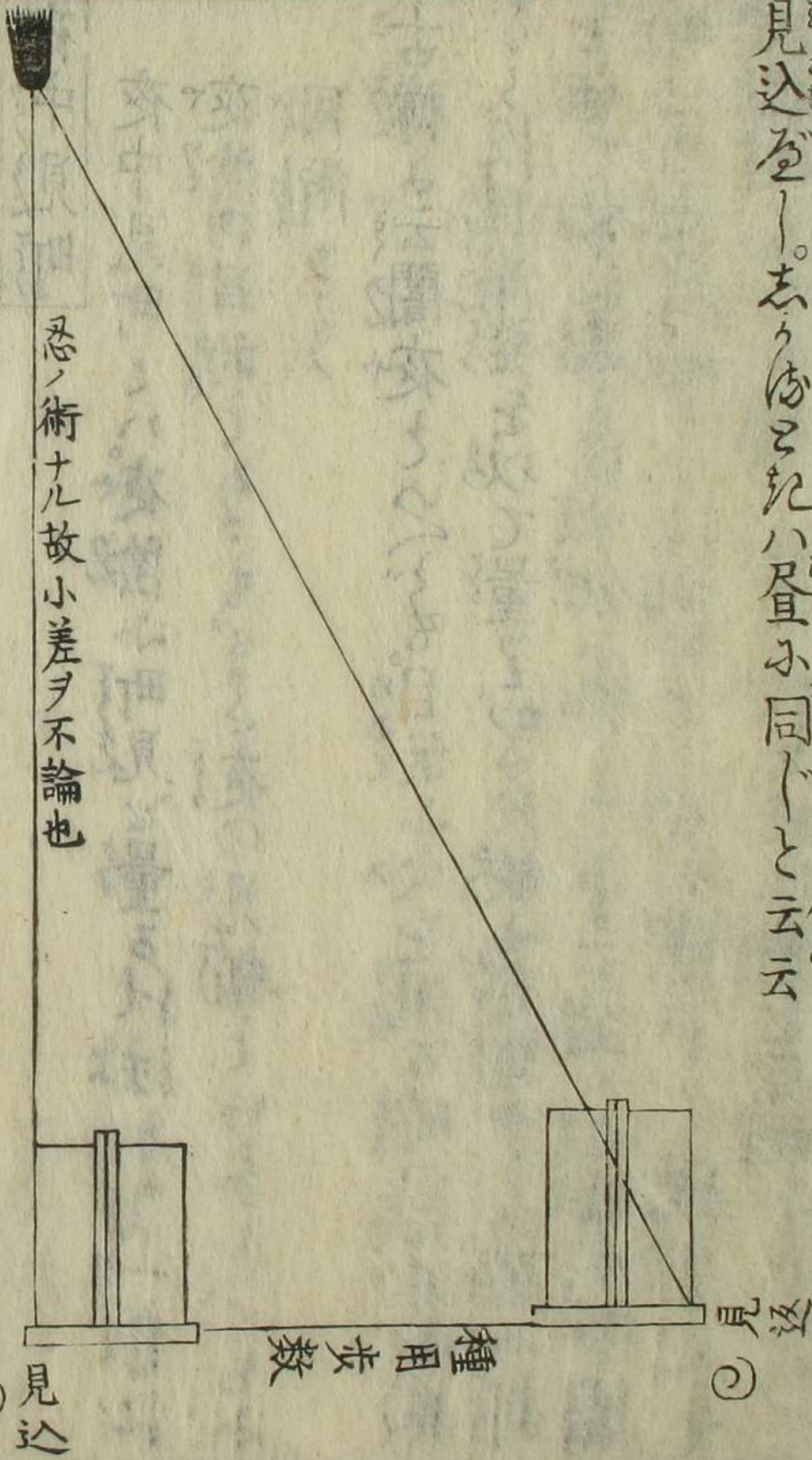
極傳解

夜中見町

夜中見町とは。夜陰ふ町見と量るは法なり。一書に
夜陰の目的とあるも。まゝ夜の見様とらふともも
同術なり

古傳云闇夜といふも。目的ふ火を用る時ハ白昼不異
なるに。但渾発を以て量るが故に。故に定規やりの器を割
を併て常に遠く尺寸分小摸してまをる也。且手本闇
時ハ見込見返とも。知かこさ故に小圖のごとく。線香又
火繩等もて短く切て火を付け。是を目的ふとらひて

見込を。去るゆゑに八昼小同と云云



又云右小火を用る時見盤みても求め知る術あり然る時ハ渾発を以て計ることも自由なり或ハ十間開て一の割

に當ると死ハ遠さ十町なり兼て試と知るなり余ハ是と推て積るを

船路之積

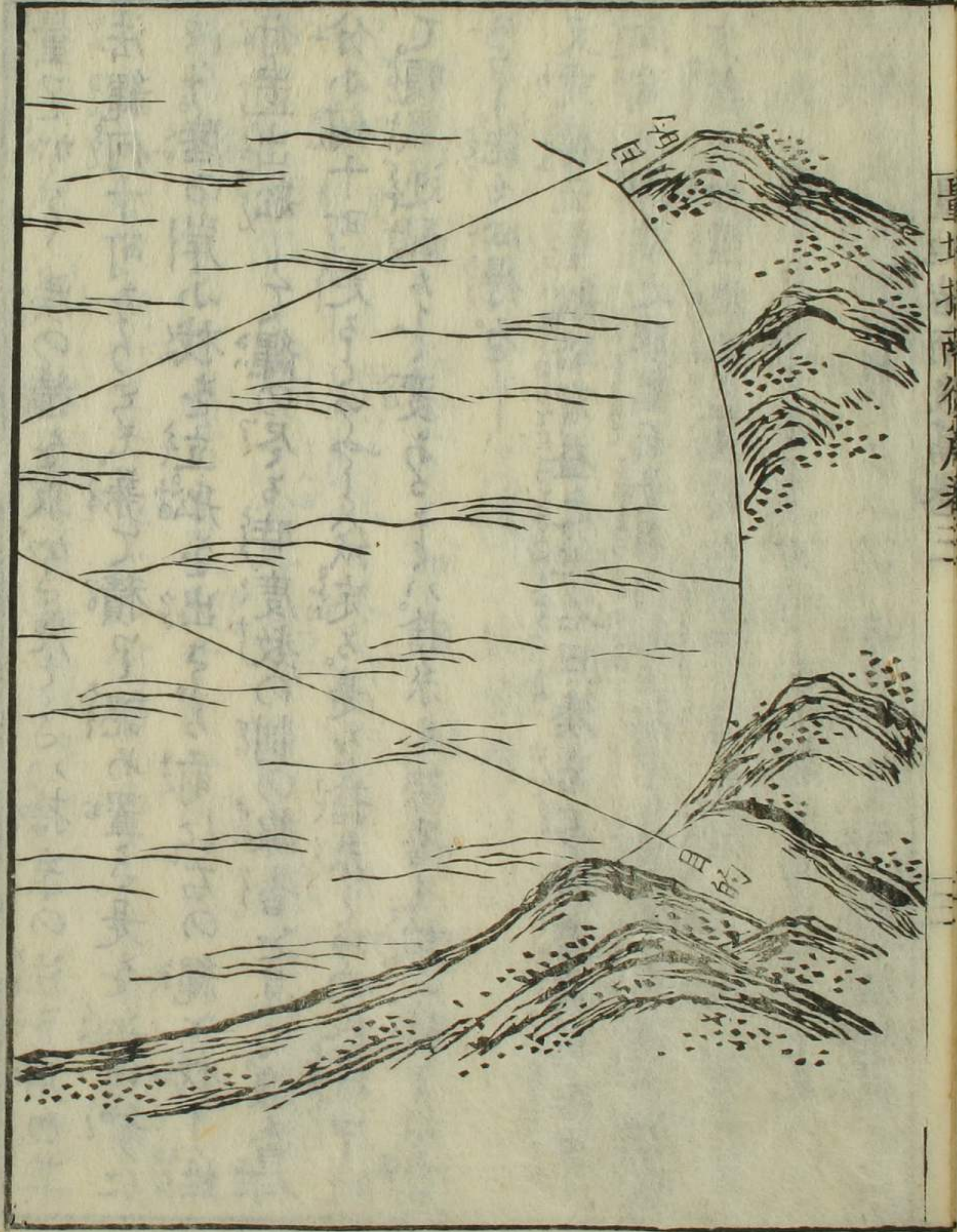
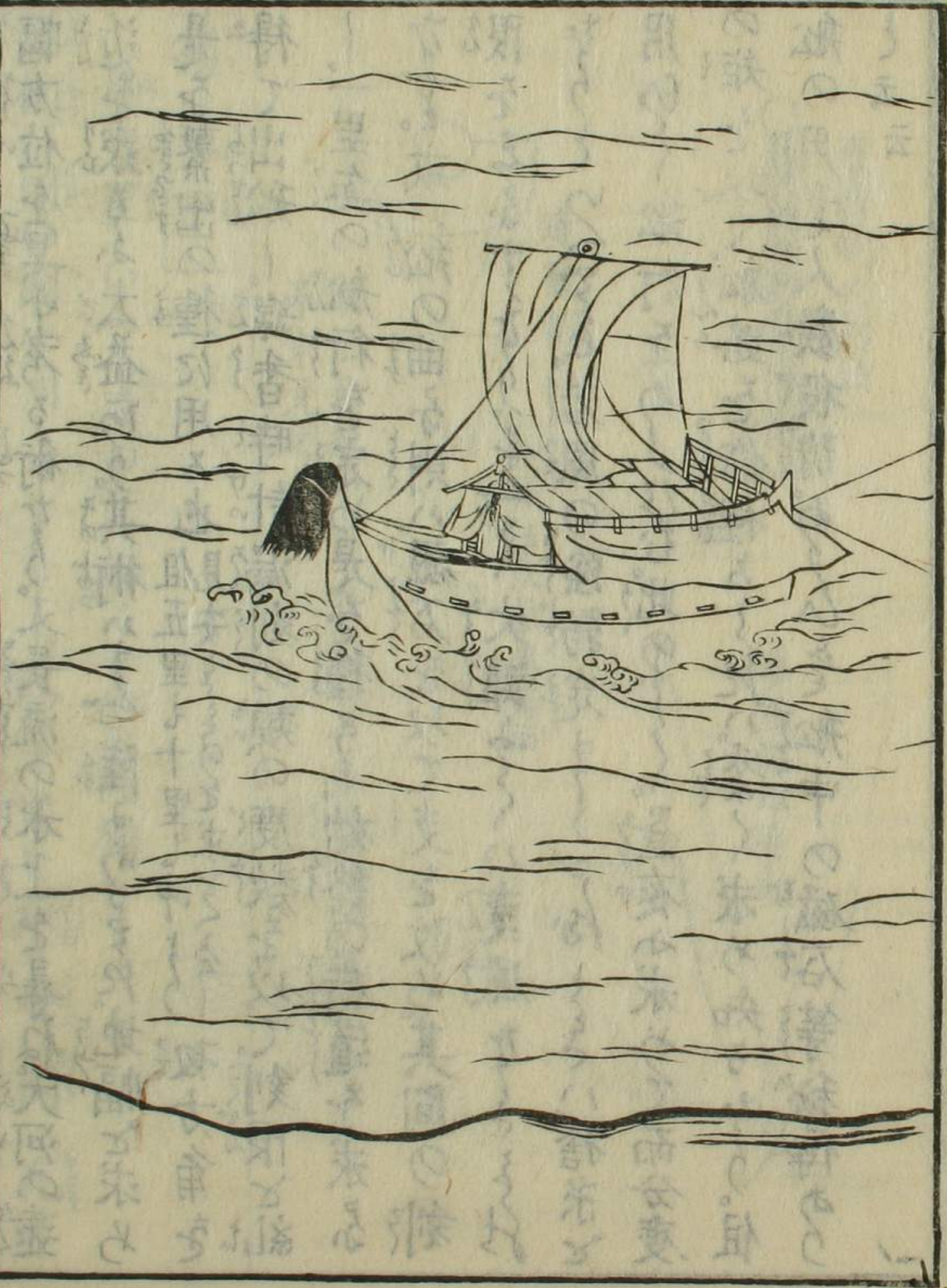
古傳曰海上を涉て曲節直径の船路を量知の術
 なる是ハ船路の要といふも同術なり
 術曰先陸地小於て湊口の両端の廣幅を求め是を海上
 の種と云。扱船中より度数を仕掛置磁針を以て方位を
 極め然して出船す。度数とハ線香土圭詠歌傳聲捨糸
 等何あても里数を試するは品物をつかたり。勿論洋中あて
 変風あるともハ捨糸なり。何れも其船の走の様を察し改
 むる。昼夜右の如く。怠屈すべし。曲徑路一次よりの方
 位の町里を紮すこと。嚴重なるべし。然る遠路の船路曲道

直路掌杖指がびくなくん」と云云

或傳曰湊より船出ざる以前近邊の山へ上る。湊まで町見を勤め。何十町と知り。其種の口を違ひて。扱長と二三尺許の竹を渾糞のどく拵へ湊の口は合せ。要と能く置湊より船を漕出すべし。舳立右の竹を以て湊の口とする。竹の開口湊の口合の時。軍前陸まで町見を求る所の道程と均く舟走ると知るべし。是を湊の種といふ。度数の制。度数といふ何れをも以て。船の走り度知るべし。圖のどく。竹筒を拵へ寸分を盛付け。内線香と立置。右に湊の種をとりて量る。何十町何分燃とて。是とえらして。一分何町走り。一寸何里走ると定置。線香の寸分を以て。海上の道程を知る。是を火刻といふ。又湊まで町見

量るがごとく。湊の種を取がたると。捨糸の法を用ひ。其法繩何十町なりとも。兼て積り認め置き。是を船の舳に拵け。陸の岸小杖を立。船を出さるる前に。右の繩と杖と結付置出船して繩の尽る時。度数の制の線香を見て。線香何分何十町走るといふ。定る。是を捨糸といふ。又洋中に。順風逆風をいふ。捨糸も線香も始の試とは違ひ。能く心得をいふ。

又或傳云。量船路有益之地。名曰湊。岩石押滄波而必有干。両端其両端之求幅。而是用出船之種也。得順風而洋中趨。船少無止。如陸地也。蓋曲折而求知之。乃船路之術也。云云。是又前条小同し。と語なり。漢文のどく。記する中でのこと也。一傳云。船路の積といふ。行舟の常道屈曲の徑程。凡て地

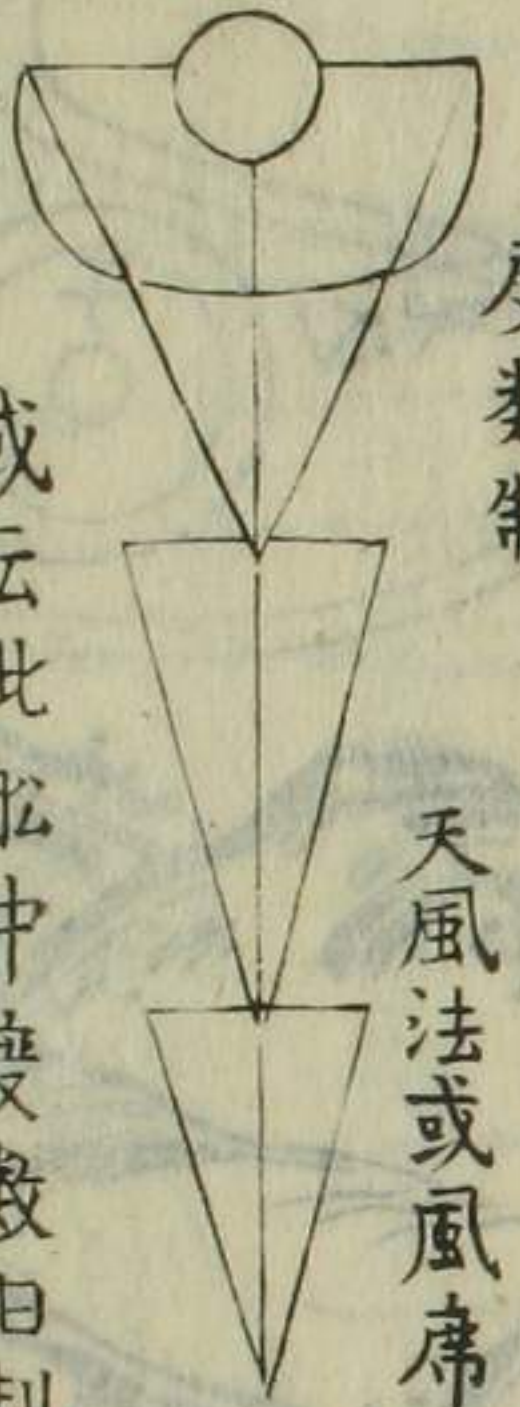


幅方位を具小考る術なり。又長流の水上を尋ね大河の遠
 近を求るも大益有り。其術ハまづ陸ニあるを以テ地幅を求め
 是を繫出の種に用る也。但五里も十里も沖より叔方角を
 得て出船。線香時計漏刻の類の度数を以て刻限を亂
 一。一里毎の船行を定め是を種。始終の行道を求る
 たり。或ハ船の曲を則ハ磁石を以て支を改め其間の刻
 限を多ふすなり。とて大難。或ハ変風なるとして
 なりといふこと。若風の強弱定まらざれば捨糸を
 用ひて船行をわすたむ。此の如く。昼夜亦求めて而分度
 の矩を以て船路を作極るとは。委く求め知るなり。但
 船の用意人数役附あり。いそぎ船中の磁石等秘傳あり
 と云

度数制火刻法

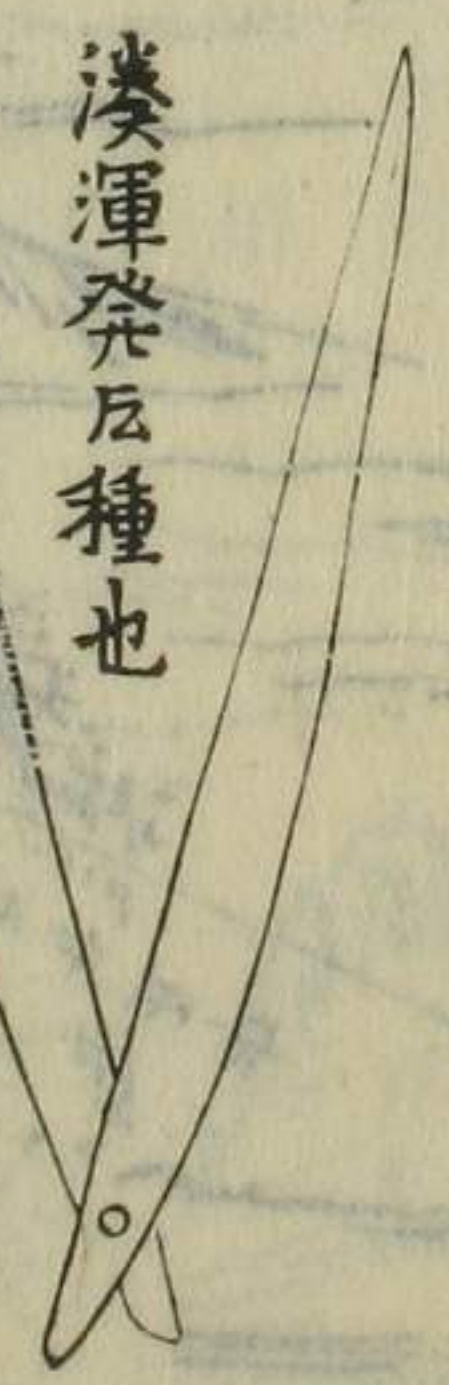


度数制



天風法或風席氏云

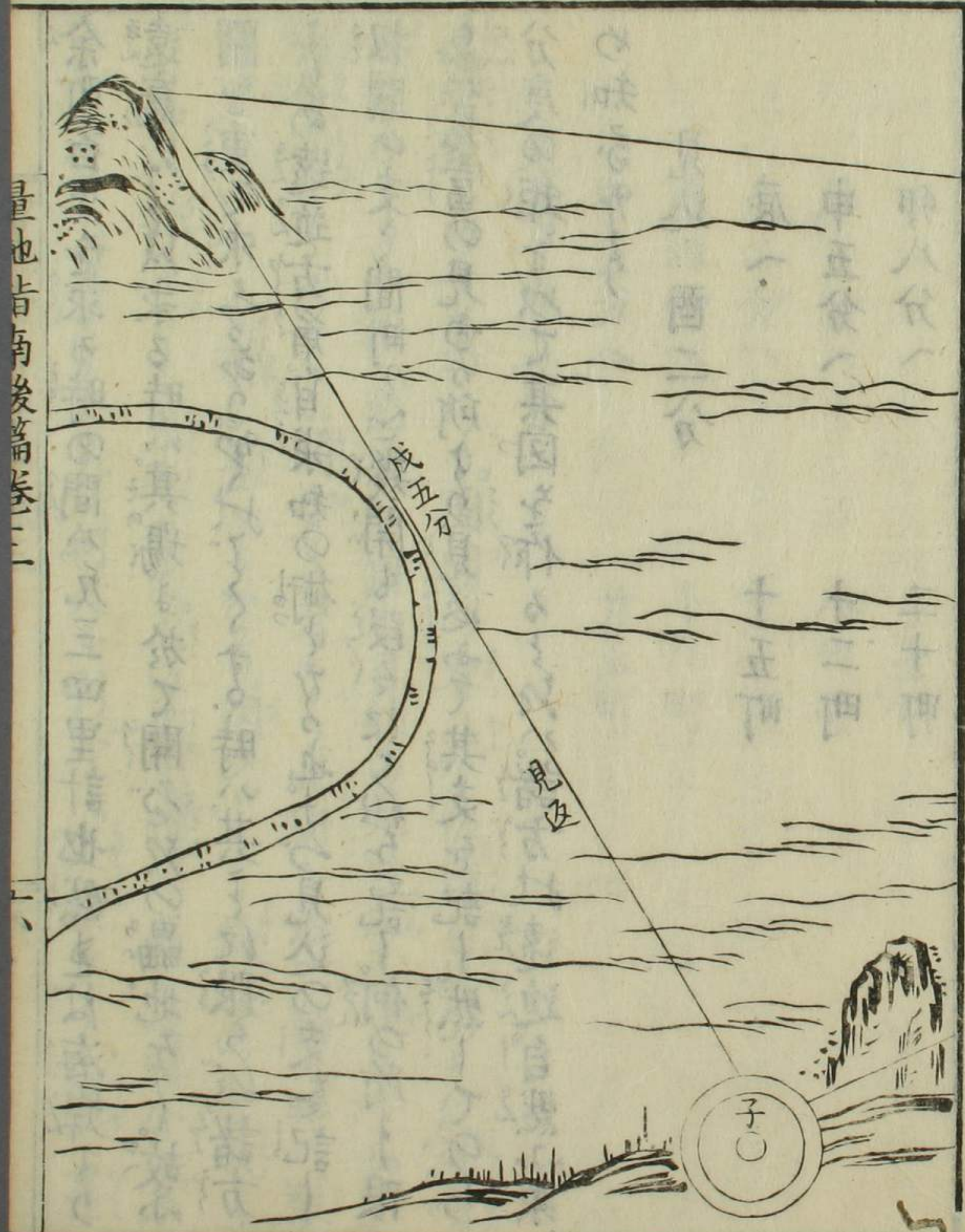
或云此船中度数旧制也依無益今無此器云云
 予未見之



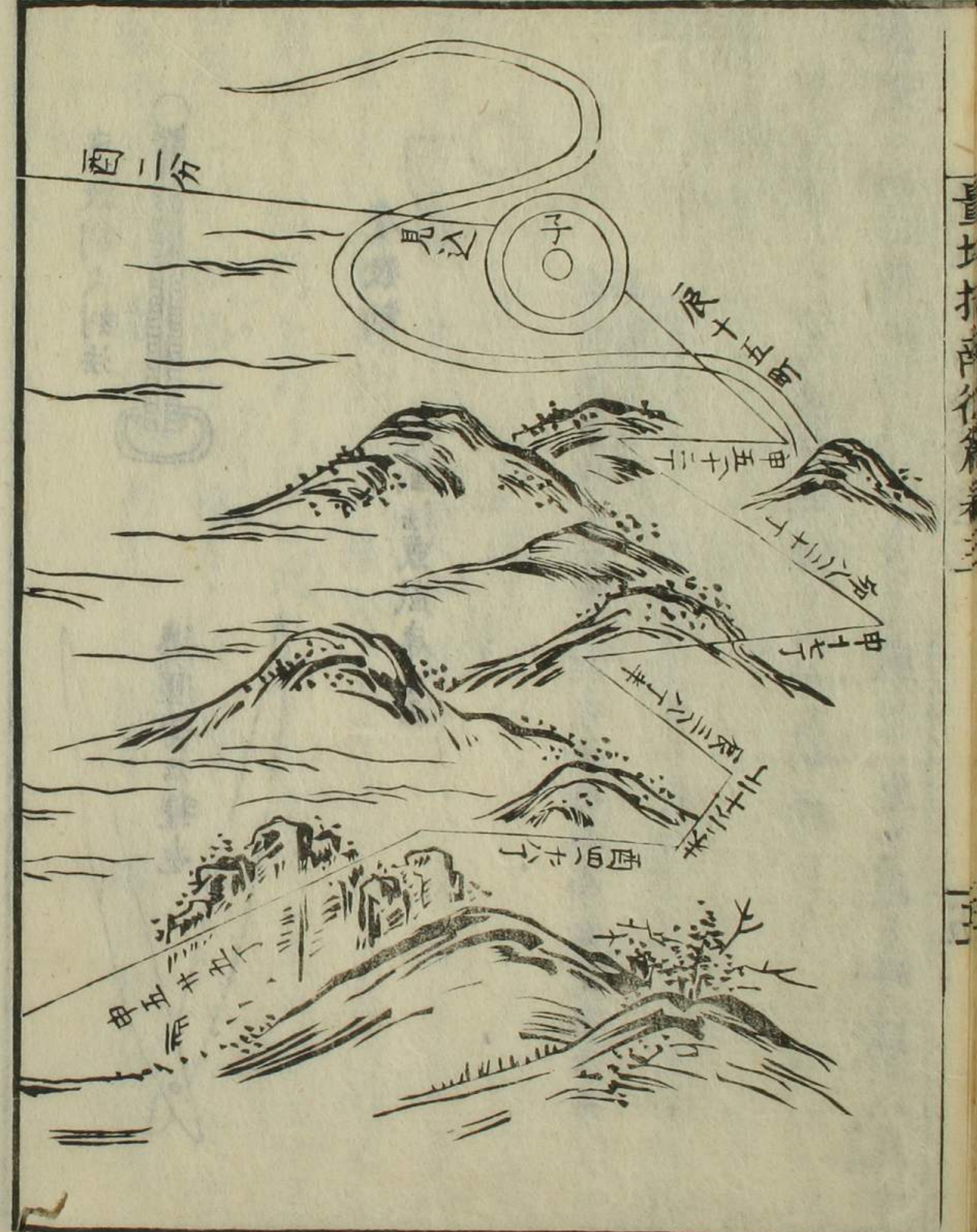
漢渾天種也

積遠里

積遠里といふも遠里の法といふも同術なり
 此術ハ国の圖小用るに多し。或ハ十里を求る時の関ハ九十



量也上角南後南長三一



圖二

量也上角南後南長三一

余町百里を求る時の間ハ九三四里計也然もは海岸より
 遠竄など伐求る時ハ其場ヲ於て開を以ての畷地なり故
 開を重て求るあり。かくれくする時ハ其場に限らば諸方
 りの遠近方角自求知の術とかり也。まず見込の支を記し
 叔開の支と間町とを幾開も段々にこれを記し何の所り限
 らば見當の見ゆる所より見返して其支を記し然してのち
 分度の矩を以て其図を作るとは。諸方ハ遠近自然未
 め知なかり

見込 酉二分

辰へ 十五町

申五分へ 十二町

卯八分へ 二十町

申へ 十七町
 辰三分へ 八町半
 未二分へ 十一町
 酉四分へ 十八町
 申五分へ 廿五町

見返 戌五分

遠里矩とのふものり。国図の要法とて遠目的の條會
 慥なるる。此術を用ひ目的の見込至て遠さるれば
 線會決うづゆること。間多き者なり。此術を以て勤る時ハ數
 百里といふも求ま差るるなり。図の條線の會快る
 ざる時ハ針をこし糸を付て元の墨に隨て西方へ引合せ糸
 のうへ合て會まかるまで何尺も引べし定規をこし隨て墨

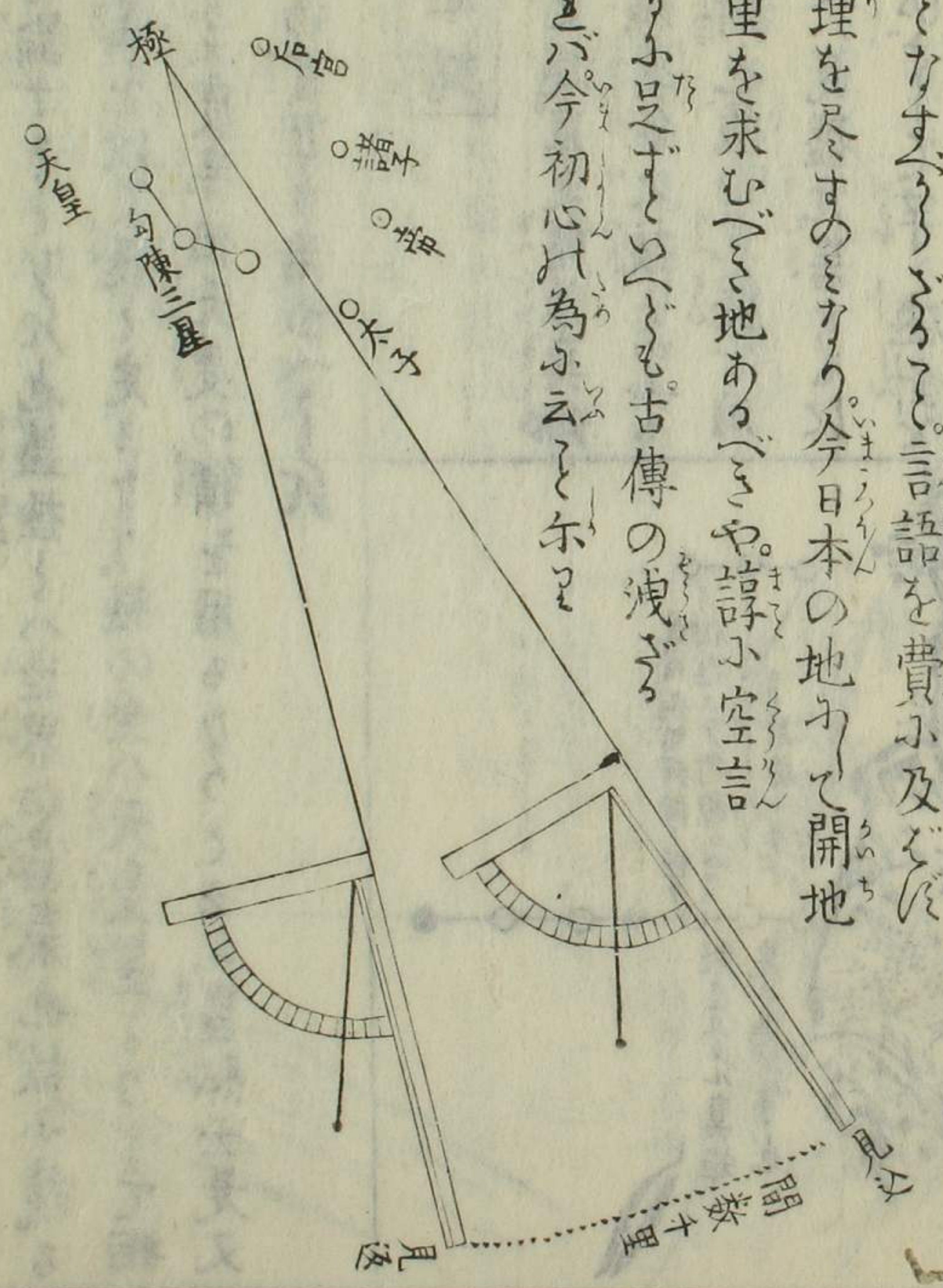
と引てハ。毛髮の差あるなり

試北極

古傳云天の高さを量る術なり。北極の積といふも同術也
 量天尺を以て北辰を見込て下糸の當る所を記し數千里と
 趨す。又北辰を見込るとハ必下糸の當る所を差出來す。其
 差の口を數千里小用ひて。下糸の全長を計るとハ天の高
 さを知るなり。平町を上下に用る理なり。其術明なり。叶
 いとも。小里に於てハ求めざるべし。の理なり。謂ハ分数ノ叶
 ざらふ因てありしと云

昌弘日町見の教書各此術を載て洩すとなは空理あり

定測とかなす。言語を費ふ及む。唯其理を尽すのみなり。今日本の地ありて開地
 數千里を求む。地あるべし。や。諄小空言
 論ず。ふ。是。古傳の洩る
 所なき。今初心け為ふ云と云



舊傳云天の高とハ極の坐を以てなり。無星の天ハ天文も論ずることなれ也。蓋極ハ世界の貫氣也。故に繞る所ハ星を以て極と定るなり。極の坐ハ天皇星よりして相去る。二度半。但天度の積を用るなりと云云。昌弘云是又無替の言なり用ゆべし。

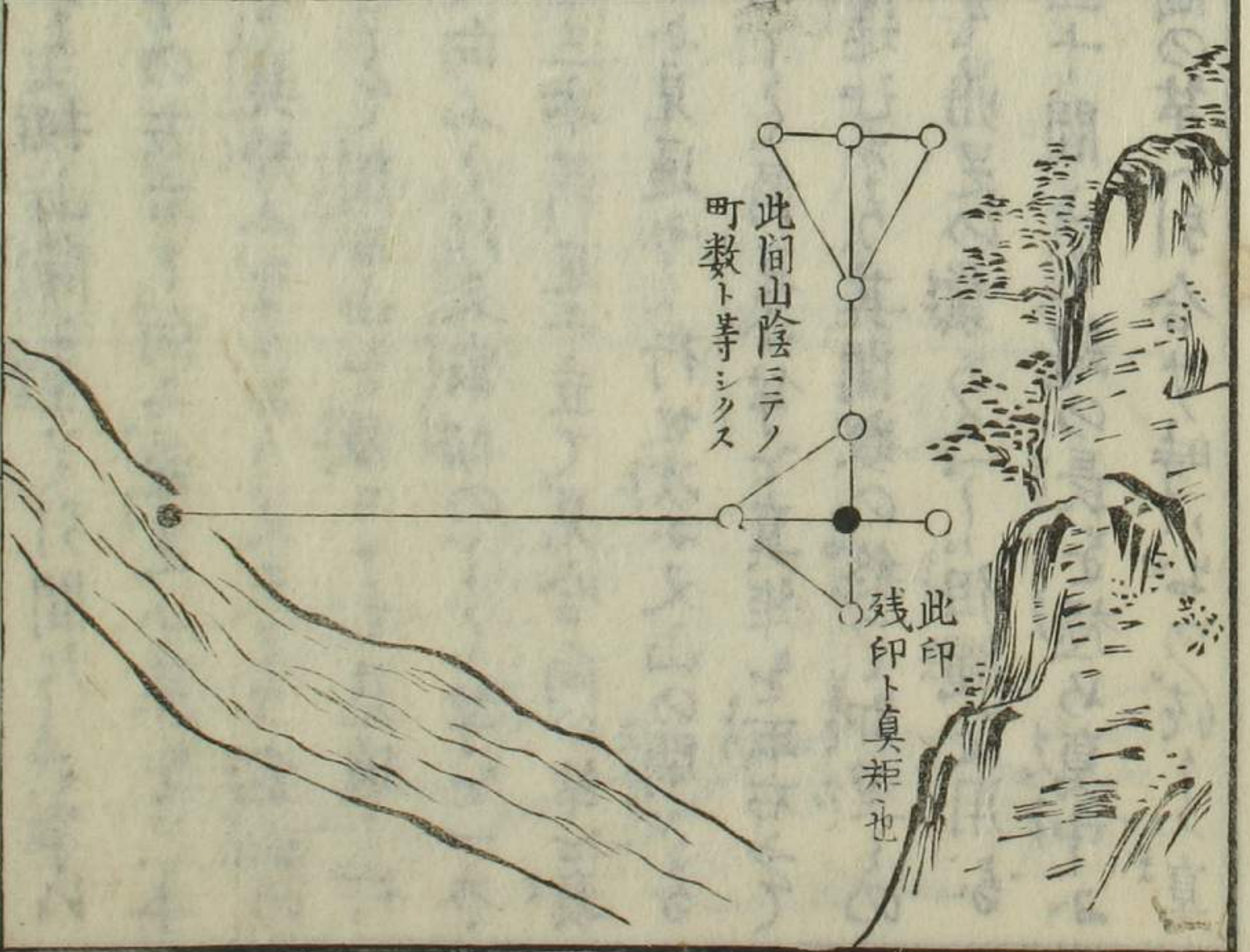
真矩繩

真之繩。真之繩張真矩之繩。真矩之技といふも同術也。或ハ見盤と用ひ。又ハ見盤元器をもに用ひずして竿と磁針と



以て量ることも有り。俱小其理ハ同ト。此術ハ屈曲する道路を直小作す。或ハ町屋割屋敷割ふ用也。又ハ田地の用水を取ふ高山と穿ち山陰の水引するも有り。如きの類ハ第一として之を以てなり。

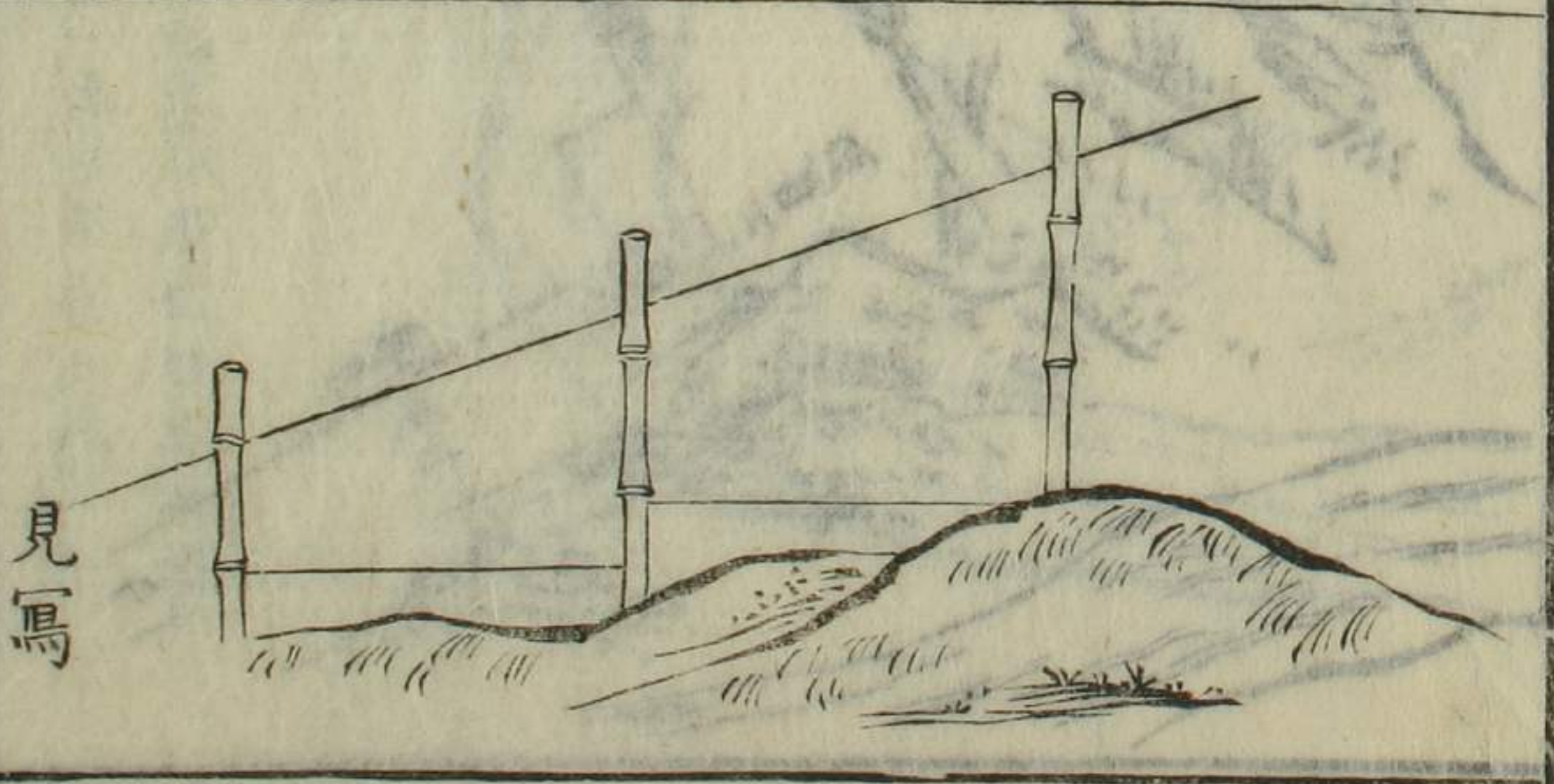
術曰望の場所ハ竿として竹を以て立す。より直矩小竿三本を以て段々小

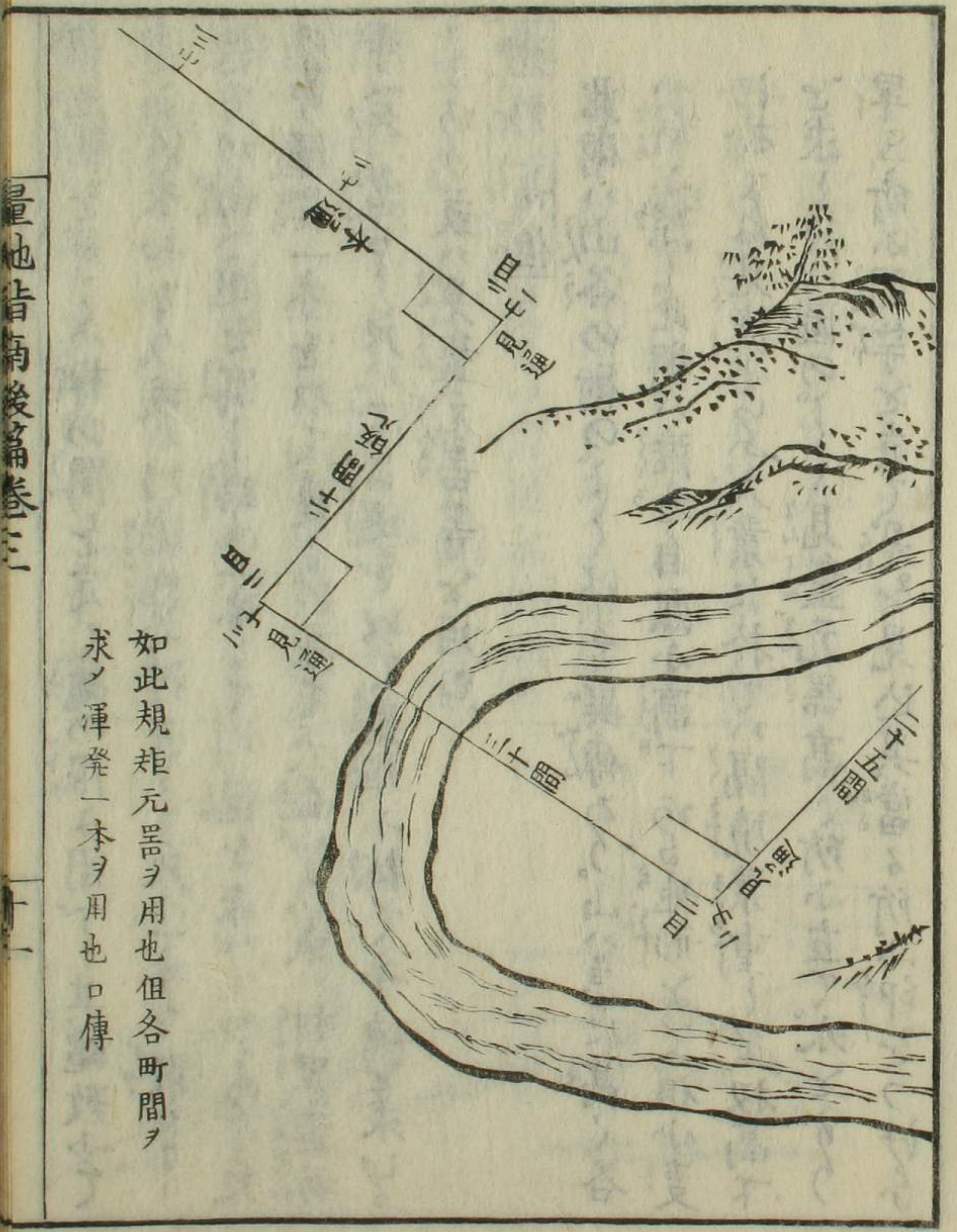
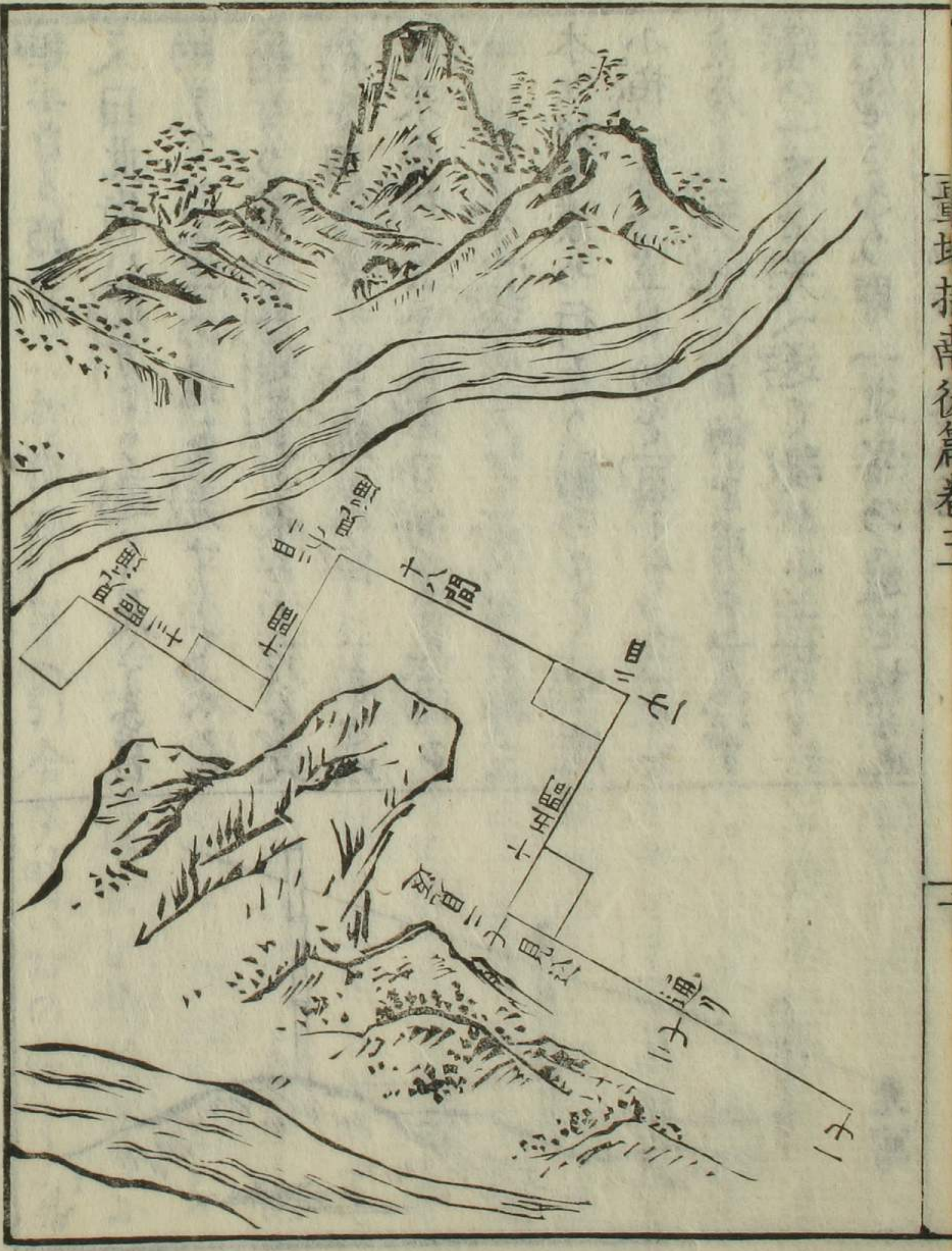


立替々々先へ見通し行なり。扱山際に至り引間たり。竿一本立て残す印なり。其竿の左右と向ふ。鼎足小竿を二本立て見合なり。向の竿も真矩ふあり。又夫より最前の段々小竿と立替送り。開る山を離るまで見通し行なり。扱開る山を離り横へ向ふと。又最初の段々。竿と一本残り其竿の左右向へ竿と二本鼎足小立て。見合向の竿と真矩ふとりて段々初の段々小見通し行せ。次小又山の開る所に至て目的の方へ最初の段々。鼎足小竿と真矩を取。右小山陰を勤る程間敷を進むなり。其間敷の終り即望の場所と真矩なり。此所も鼎足の業あり。但繩を用ふ。十間も二十間も。繩の長を極め真中へ印を付て。先の竿へ打掛面の竿へ引合す時ハおのほろ真

矩小なるぬつ

又曰此術ハ此方より遠く見へる目的まで一文字の通を差すて求る術なり。或ハ直道等と求るべし。此術を用るなり。古傳ハ掉二本とて求り行といへも。若目的を見隠す時。道と失ふ故小これを改む。掉三本とて求り行なり。圖の如く望所小掉一本と立目的を寫して。又二本と立る。而後より目的を用る不及す。蹟の一本を先へ送て段々小立替々々行るさあり。即一文字の通を極る也。





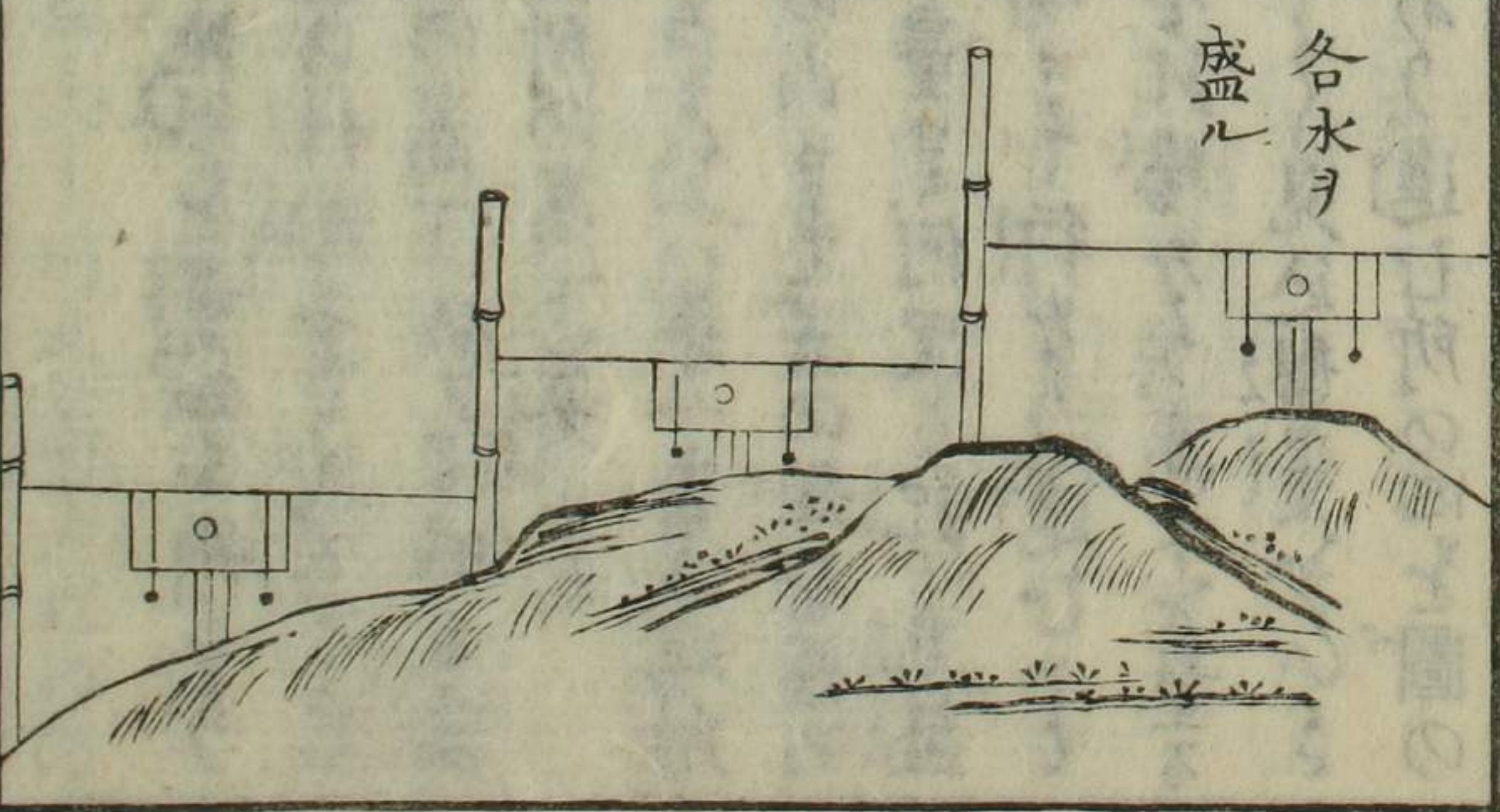
如此規矩元器ヲ用也但各町間ヲ
求ノ渾糞一本ヲ用也口傳

但地幅を知こハ棹の間を定て繩の限用べし其繩数めて
遠さ求知たり或ハ川泥等へ行當るハ一本づ段々
越て川向へ通を寫し跡の一本を以て幅を求べし其
の節渾癸一本を以て遠さ求て大益なり或ハ村里木林
等へ行當るハ二目返を以て直矩小按て本通を求り
しり或ハ見盤元器等を用也

地形高低

此術ハ山谷の術のごとく異傳あり山ハ急に高く谷
ハ斜小深し此術ハ陸地自然小高下ゆる地形とす但小変
に於ては見渡とす大業に於てハ隔境累重とす板高下
と求るハ圖のごとく見盤元器高く所小立て水とより
早き所小間竿を立て是を見込其當る所小印をつけ

これハ高下の差あるありゆくの
ごとく段々小送つて差とある時ハ
始終の高下各あつて或ハ類
書の術目小地形高下小事見
渡累隔累倍かゝるも同術也
傳曰小変見渡とすハ用水田畑の
高下又ハ屋敷等乃高下軽と業也
然ながら若干の大業も勉べし其法
盤を豎けて平直を極め盤の上端ハ
定規を置見當りて高下尺量る
所へ棹を立て見渡すかゝる盤尺と
棹小印を付て其印の上と下りめて



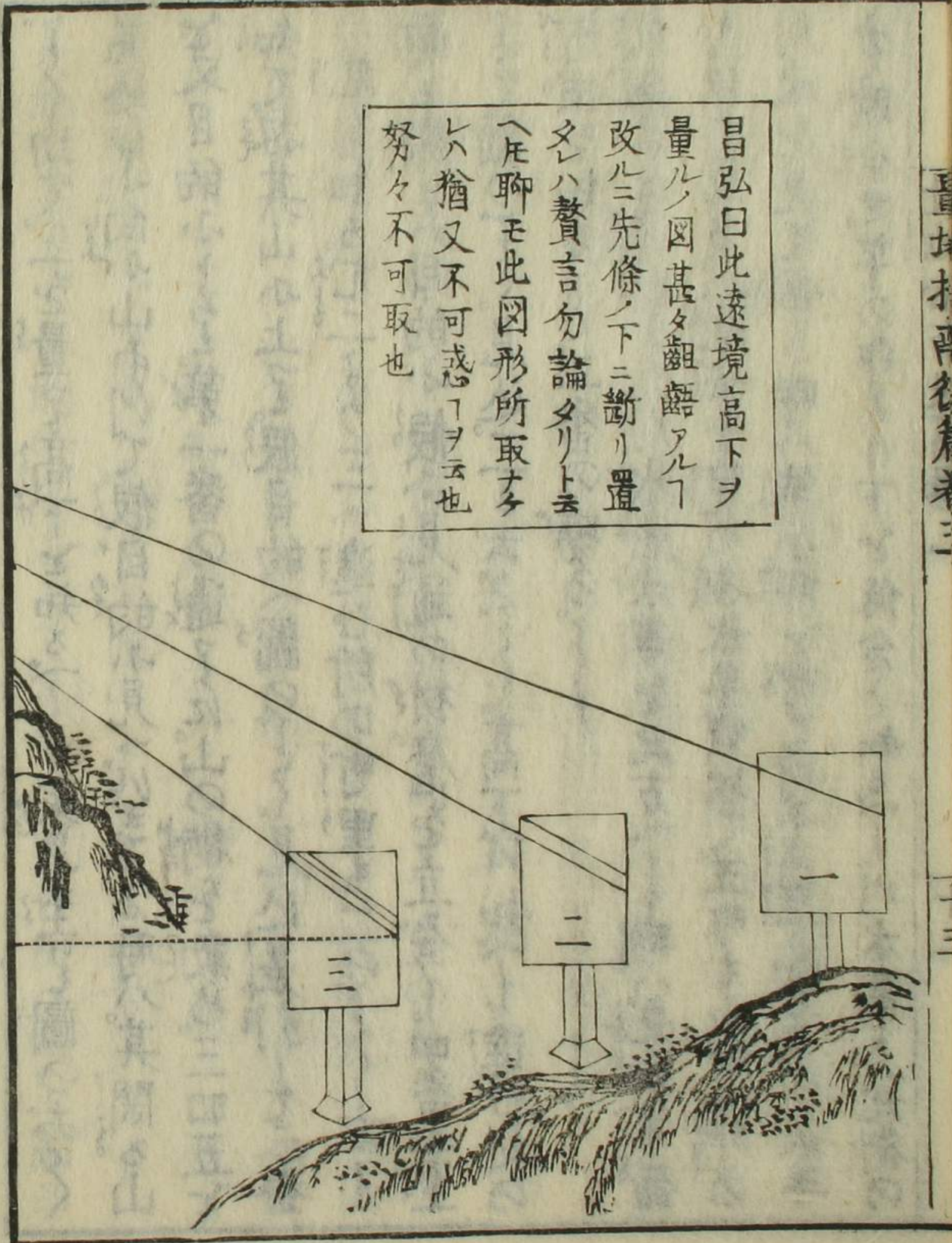
其地の高下と云ふ事なり

又曰隔境累重と云ふ隣國の高下地形を量知る術なり
尤大業なり故に盤小水と盛る体の仕形ありてあると云
とも假令ハ江府より常州総州の高下はなる時を筑
波山を目的として山の高下を其所の高下と考る也
右は所謂隣國の高下地形を計る事なり第一番の場所
ありて向上の平町を勉め假目當の山まで五の矩を極め
山の術を勤め三の矩を極め四を量り何里と記し見盤
小悉く盛つけ次の盤を立たる場所まで行なり進むこと
何里と町里と打て知る盤を立たる場所なり高下と量る
るは地なり二番に至ると又圖のごとく見込盤墨と云ふ
其地の高下又目的の遠近ありて差あり進む所の四を圖の

ごとく切て三を量り高下と知るべし二番に至ると圖のごとく
見込しふ向ふ山ありて假目的を見へば進む時ハ其開る山
と又目的小と云ふ第一番の通る山の術を勤め二四五と
知て扱其山小上り假目的へ圖のごとく見込差引くと二番
の地を知る尤二より三へ進む所の町里も二のごとく右
断る開る目的小假小見通の材磨を立るなり四番に至
ると圖のごとく見込三は云々ごとく高下は知べし進む處の
町里を知る事なり二番の場のごとく

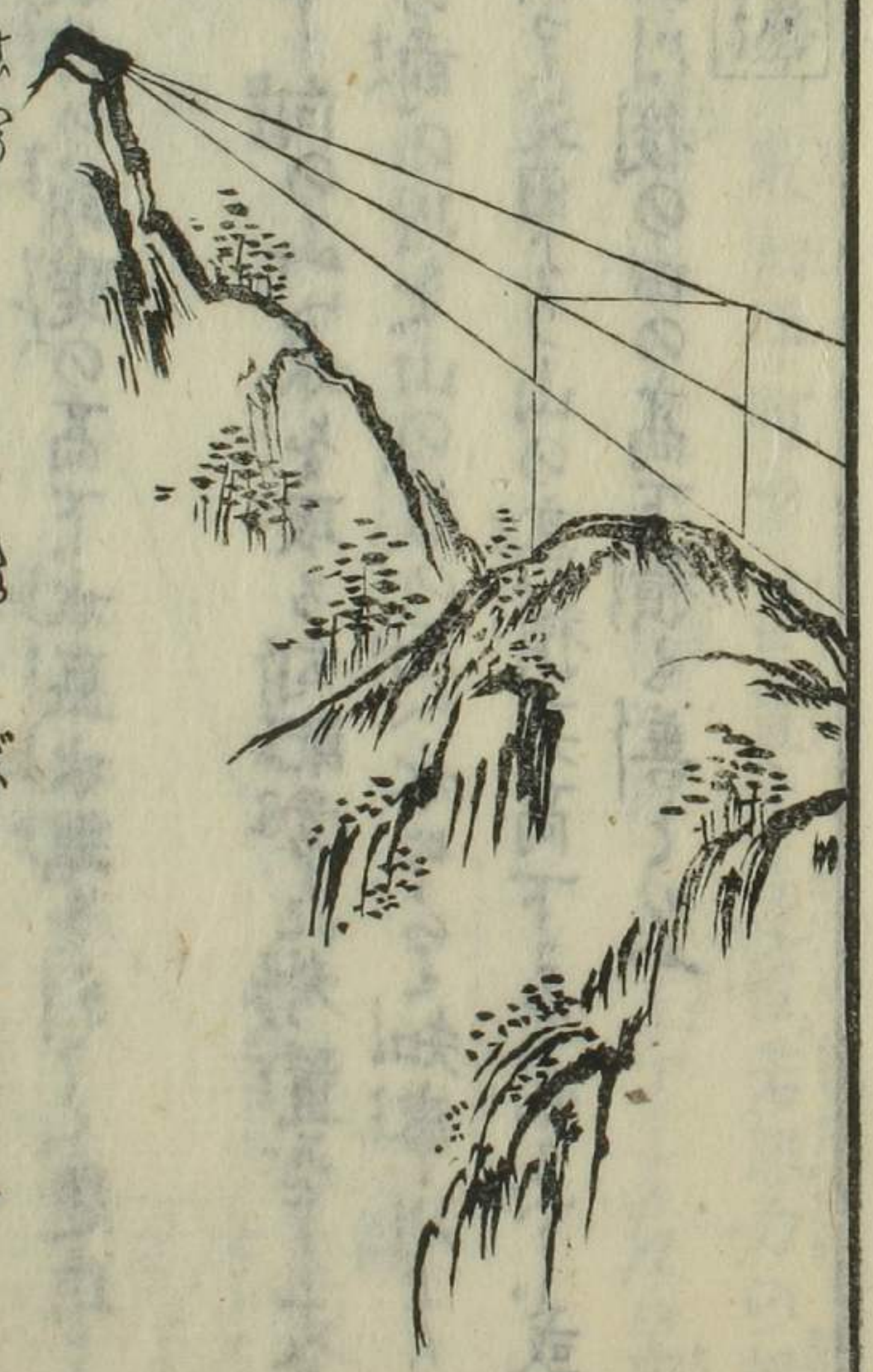
或傳ふ云遠所より川水池水を此方へくる時ハ先水平器
を以て此方ハ地安を定め扱水平弦以て五町も十町も印の
川水を見て低く時ハ竿小印と付て川小立置此方より水平
をて脱合せ竿の印より下を低分と知るべし川水高くと此術の

昌弘曰此遠境高下ヲ
量ルノ図甚々齟齬アル
改ルニ先條ノ下ニ斷リ置
タレハ贅言勿論タリト云
ヘ凡聊モ此図形所取ナ
ク猶又不可惑イヲ云也
努々不可取也



還源を用ひ。水平と五六尺も高く臺を上げて。夫より川水
と見るを

又云彼方と此方と同直の地あり。水上と水落と同尺あり。樋
の水をさるるに。上より押うけ水はる理なり。も勾配ぬ
るは洪水のとれ悪し。水の流る程あり。其所の高さふかく

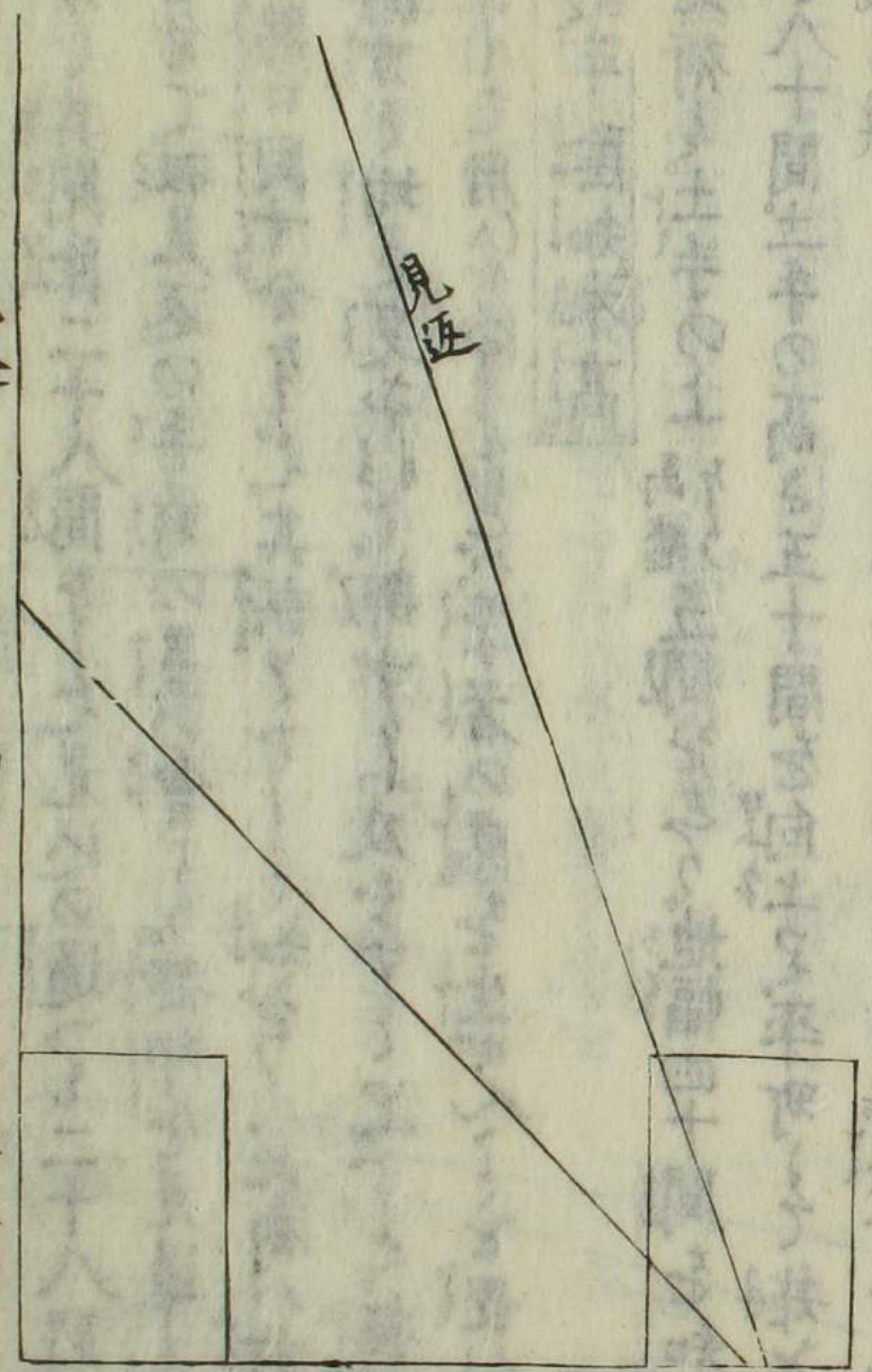


らびハ用ホ立ズ。右十町も先^まめて。目的見^め定^まりつゝハ五町目と六町目に印^{しるし}の材^ま磨^ぎを立^た夫^と見^み通^とし。又五町目より向と見通し。遣^つ違^{ちが}へ間と打^う心^ことて。中^{ちゆう}次^じの理^りなり。又十町先^まめて横^{よこ}へなりとも。斜^{しや}ふなりとも。折^ま曲^{まが}又十町も先^まの勾^{こう}配^{はい}を見^み時^{とき}ハ曲^ま途^ととて。三^{さん}角^{かく}の矩^まと耽^{とん}合^あせ。其^{その}後^{のち}右^{みぎ}の^まと^に見^み通^とし。高^{たか}下^{した}と知る。或^{ある}ハ家^や作^{さく}の節^{ふし}礎^{いし}の高^{たか}下^{した}。水^{みづ}盛^み水^{みづ}繩^{づな}を引^ひつゝ。遠^{とほ}近^{ぢか}とも同^{どう}理^りなり。

又云谷^やを廻^{まわ}し向^{むか}の山^{やま}へ水^{みづ}を取^とる勾^{こう}配^{はい}常^{じょう}に考^{かん}置^ごを^ご。又山とほりぬき。山^{やま}の前^{まへ}の川^{がは}を。山^{やま}の後^{のち}の田^{いり}へ水^{みづ}の^まと^に知^し事^じ。川^{がは}より山^{やま}の高^{たか}と積^つり。又田^{いり}より山^{やま}の高^{たか}積^つ。其^{その}高^{たか}下^{した}とて知^しる^べ。或^{ある}ハ山^{やま}の上^{うへ}より。前^{まへ}の川^{がは}。後^{のち}の田^{いり}の高^{たか}下^{した}積^つも善^よと^いふ。

中不中片極

此術ハ假令^{しかり}ハ寂^{さむ}初^{はつ}平^{へい}町^{ちゆう}少^{すく}て量^{りやう}置^おる^る遠^{とほ}程^{てい}若^し眼^{がん}力^{りき}の誤^{あや}り^まな^くある^べと疑^うつ^べと^いふ。此^{この}術^{じゆつ}を以^もて改^か正^{せい}する^べと^いふハ中^{ちゆう}否^ひ立^た所^{しよ}ホ^もつ^べと^いふ。



開
以間ノ廣サ
違ナクハ中リ
タルナリ

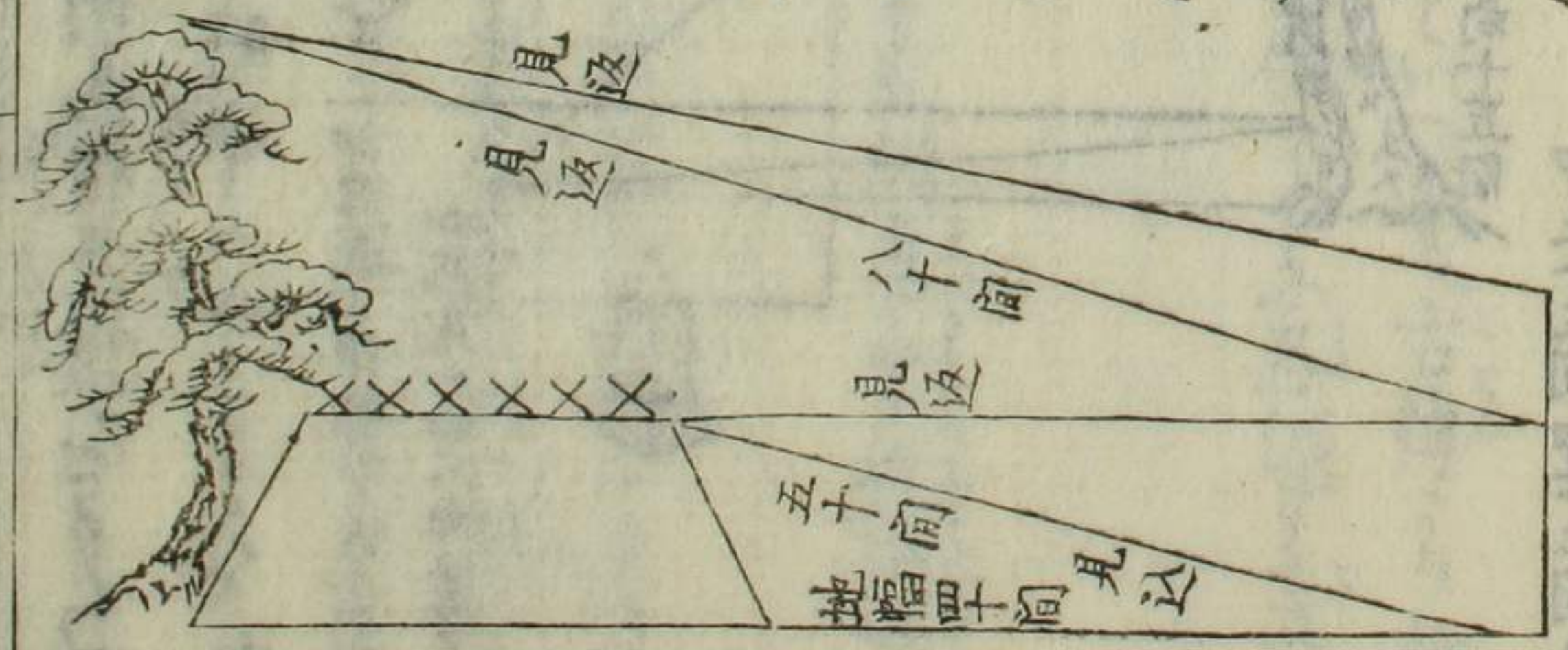
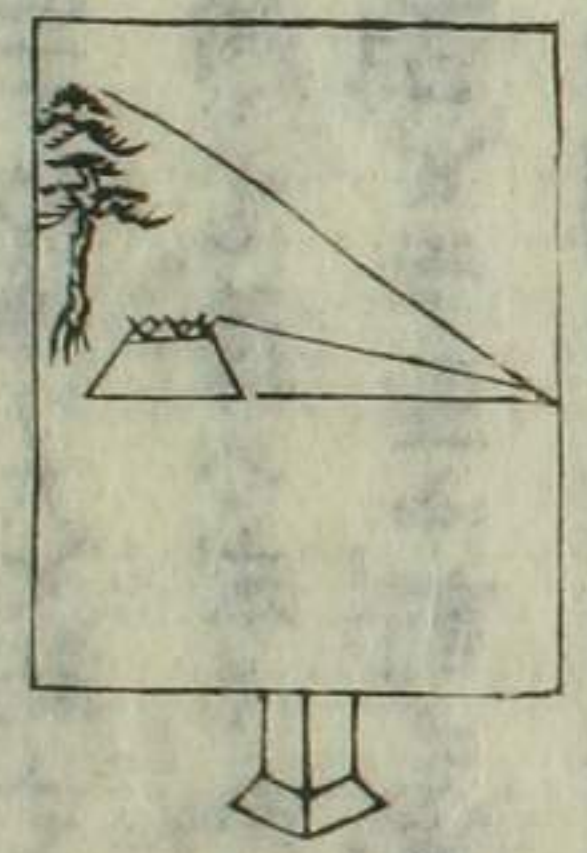
見込
中リヲ知印
此間廿八間

術曰寂初量つくる。盤面の見込見返の墨線を其終お置て。假令む其開除二十八間をくむ。見込の通つも二十八間。開除の印と付て。扱見返の手前の墨の會より。彼印を見通し。両の開除の縮口同寸分なぐむ。其誤りなぐむ。知らぐ。此術ハ前編の知雙開方と均さ夏あはれむ。辨ずる及むぐととて。極傳の一條として用ひがゆへも。學者の惑を生ぜんことを畏れ記す

土手陰知木高

此術々土手の上馬踏五間をきり。地幅四十間を知り。木の高さ八十間。土手の高さ五十間を向上。平町をきり。知らぐ。盤を豎めて。木の高さ。土手の高さ。見込。墨をいれ。各矩を計る。其盤ふ土手の形をきり。右の分見して。木の高さを知る。尤土手の両垂斜同し。やうふ。しる。時ハ知らぐ。也

又云此術ハ土手の前後同く勾倍なる時。小求たる理なり。先土手の根を。遠程を知り。扱同所より。向上の平町を以て。木乃揃まで。空の規を求め。同く土手の上角まで。空の規を求て。土手の馬踏の廣さを知り。扱右の所。小盤を豎小居へ。水浅盛。要と用ひ見込て。各墨線を引。分間をきり。刺盤を用ひて。形を極る也。古傳の終お記す



指高何分

此術ハ高下の誤りを糾す術也但見盤をりら也

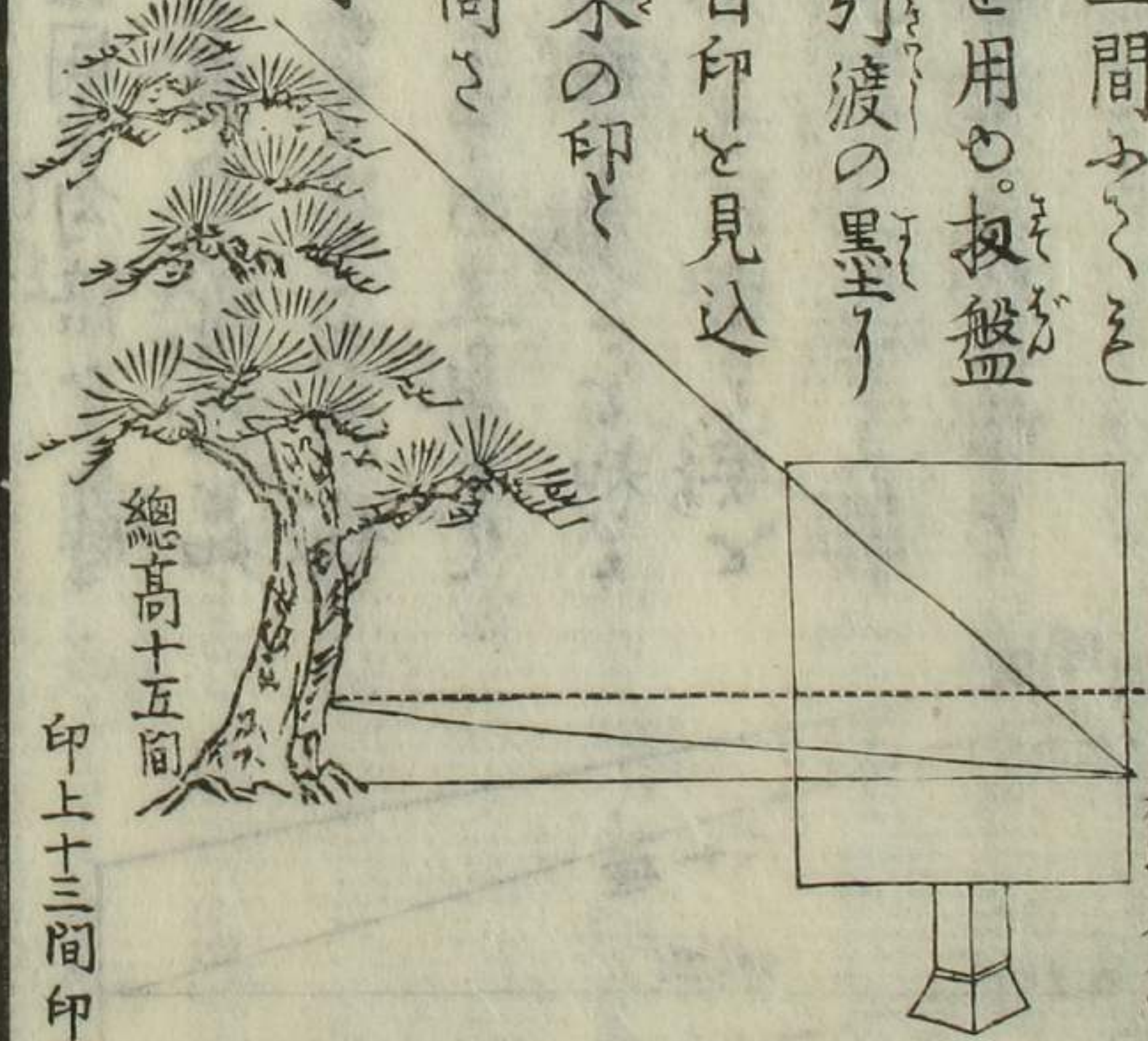
假令ハ木の高さ十五間とも豫め求め知し時中々中々を糾
さへせん先其盤面の口と十五小割て墨と
引渡し扱其木の根より一間ありて

二間ありて立木小目印と用の扱盤
と立て水ととり盤面の引渡の墨と

定木と當木小つけたる目印と見込
なり其盤面の墨と立木の印と

的當なりと知べ或ハ天守
相違なりと知べ或ハ天守

櫓の重々と糾へ又三分一
五分一等是と指す



如此見ル法傳ヲ誤ルナリ
如此見ル時ハ相違ナリ

印上十三間印下二間也

鉄炮勾倍等用捨り

此術見盤術渾矣術も小往々記す所といへども古傳より新
傳小至つて皆是を奥儀の巻小載故小廢す小忍びず爰に
出す見者贅言を罵るるやなかり

向指真矩

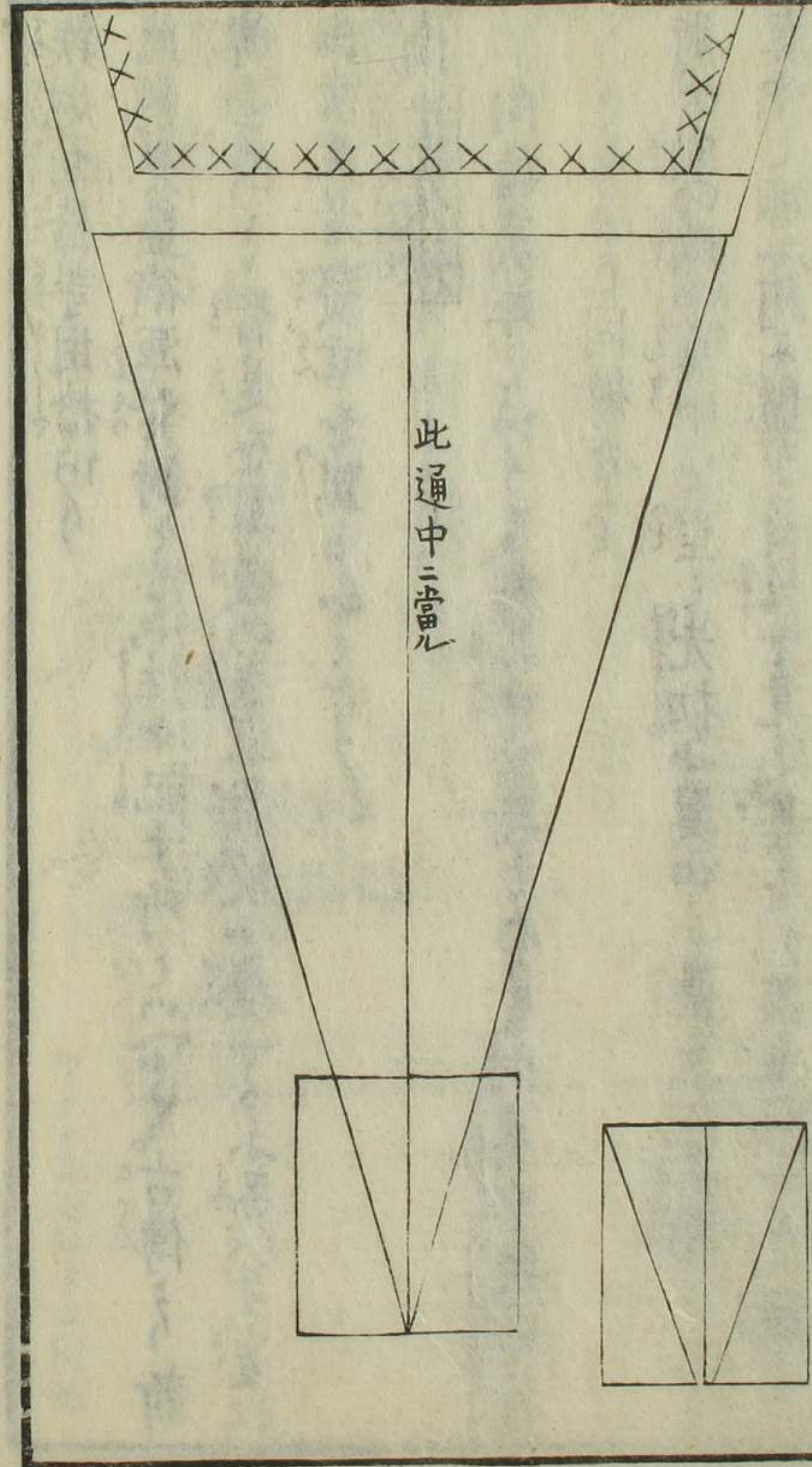
向指真矩といへども向正中と指とありも向真中從陰指

とありて同術なり

術云向の両の真中と望と先初小真中小墨を引其場小至つて
真中と思ふ所小盤を居左を見込墨を引其尾頭を右へ寫し
是小定木と當て見込當る処迄よりて當るなり扱各當りて
得て中の墨小當る所向の中なり

又云盤の真中と割て墨を引大圖向の中程空眼を以てるを

求む。盤を居定木をを以て或ハ左の端を見込で墨をひき
其口と右の方へ横み。墨を引。是ハ定木を當て右の方を見

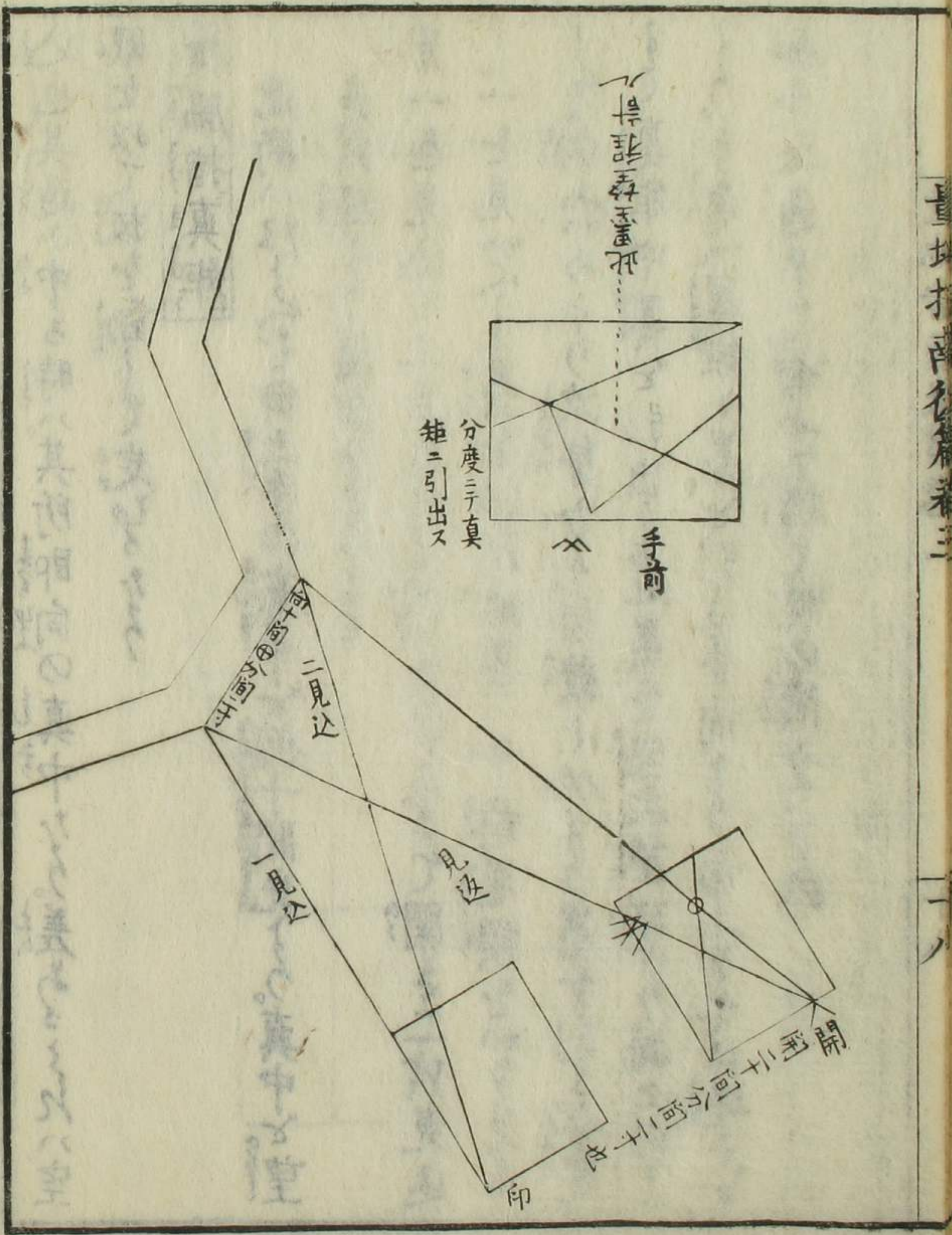


此通中ニ當ル

込也。其通小中る時ハ其所即向の真中なり。差あるとれハ空
眼を以て板を動して定むるなり

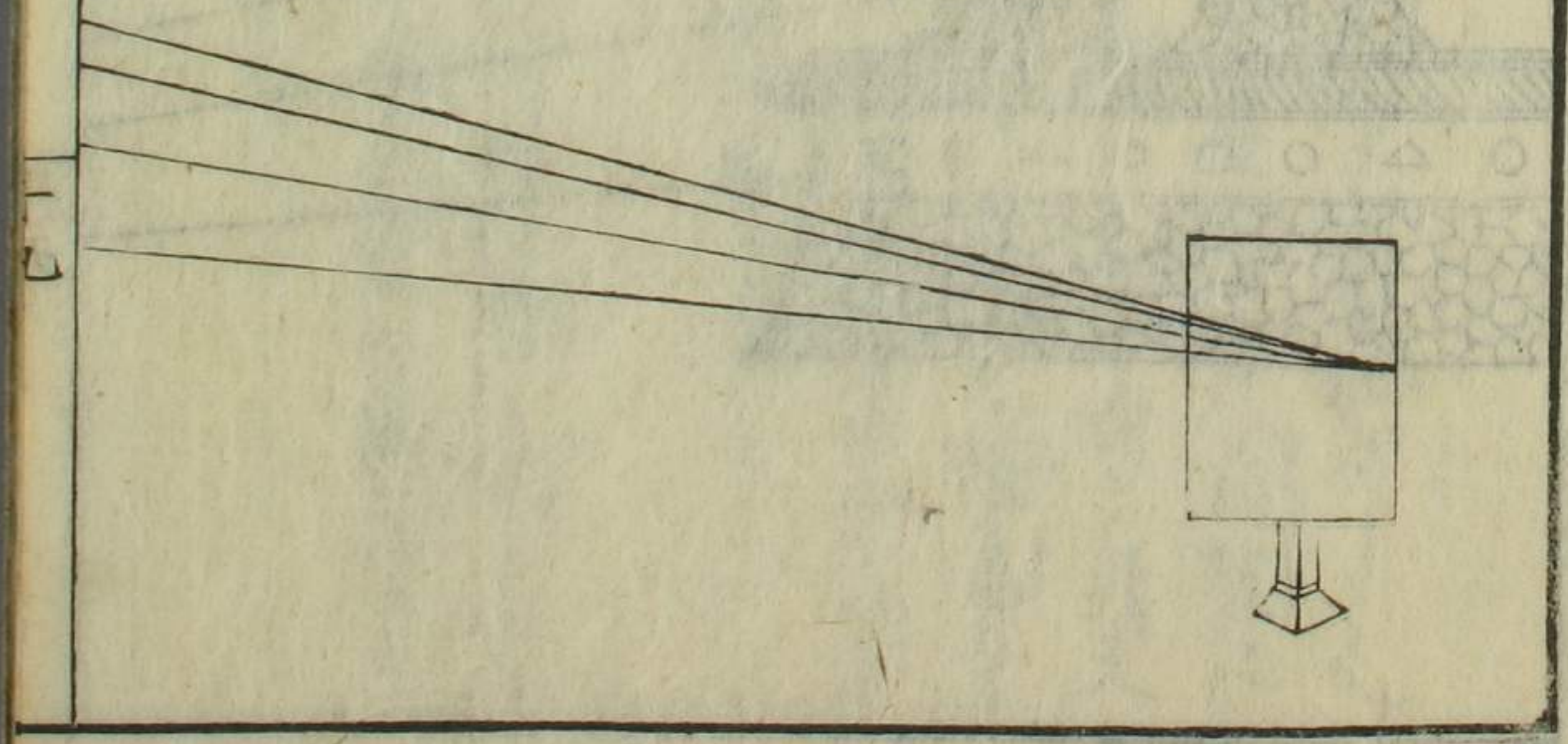
從脇指真矩

此術ハたどむ。土手の真中と何十間先より。真中と望
是浅脇より通をさすなり。先一を見込。二を見込。墨をひき。さて開き。二浅見込
一を見込。墨をひき。地墨ハ手前尾頭をかる。先
一。向ふ。次身なり。◎絞と。分度
真矩中墨を引出。此墨を望次第けり。扱の上
手前へ真矩小墨を引。手前より向ふまでの遠さを
知る。扱通して向ふへ指て望の間あて

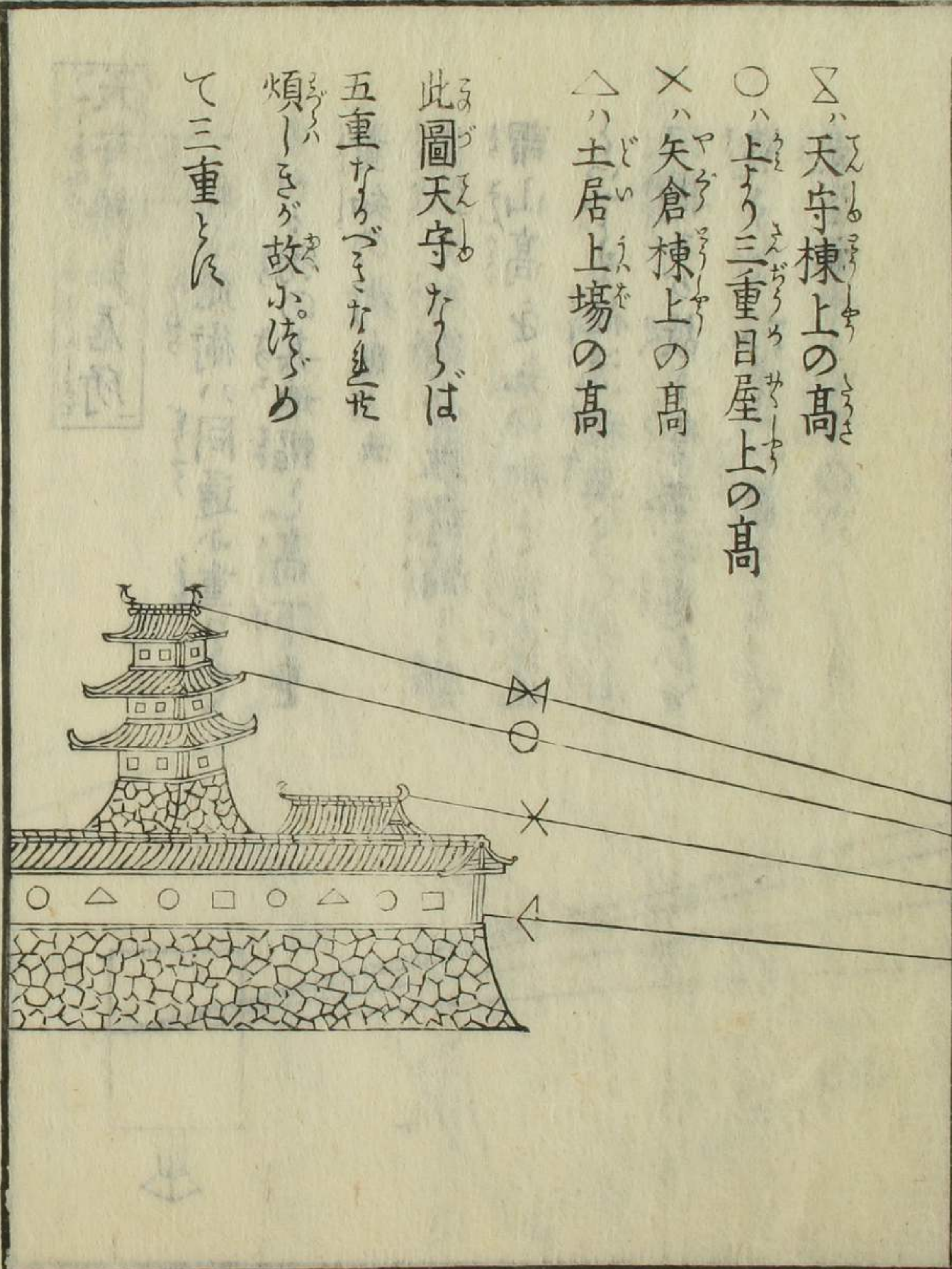


天守櫓知居所

一傳小此術ハ同通小重クして見ゆる物の其地幅と高下を量知の術也云云
 昌弘云此術全体前編り所謂山高を知之術と同意也といつても他流秘奥うで條目に掲る故小學者の惑ひを曉さんぐたりお一圖をなして是を示すと下のど



- △ 天守棟上の高
 - ハ上より三重目屋上の高
 - × ハ矢倉棟上の高
 - △ ハ土居上場の高
- 此圖天守なるは
五重なるべきにせ
煩しき故には
て三重と爲



山用表裏

古傳云山の表裏と用るといふ山は裏表わつことを知るべき
解して云。山の表裏ハ人の座するごとし。人座する時ハ前後に
志て後急なり。故に急なる方後裏より緩なる方と前と爲。又
東西南北の山。陰陽に配分する理も同様なり。緩急を
以て定るべきに。其國小居てハ其國の四方の山と向ふ
所皆表といふこと宜し。何ふはけても其理あることなり

横山形

山の形を寫すといふハ無益の條なり。何時に業と勤るも
山の術ハ山の形を寫さばといふことあり。但山景を圖画する
ことハ是ハ輿地術のあづかる所あり

山を賁る

山を責るるといふ六国の圖をかく。大山を小く画けど空虚なりて如何なり。又大く圖すれば國郡亦蔓りて外面の妖あり。因て大山ハ分間よりハ小く高く圖するなり。先山の裏と画くともつひ又雪を顯すともいひり

求山之斜登

山の斜登を求るといふ目あり。是亦無益の條あり。但し遠里の高山を量るハ各別の之。其外通例山を量るハ斜登と知とせざるはなりとある也。其法ハ條々山谷の術より見ゆ

知山厚

山の厚さといふ山の根置地幅の之。小変見渡直之繩真想の按なくハ術を以て考べし。故ハ筆舌を費さば

本傳云 ○山岳進退 ○知山高 ○進退知高 ○知谷深 ○

知而山之差 ○知谷幅木丈

極傳云 ○山谷一開 ○知向山前山之差 ○山上谷底知

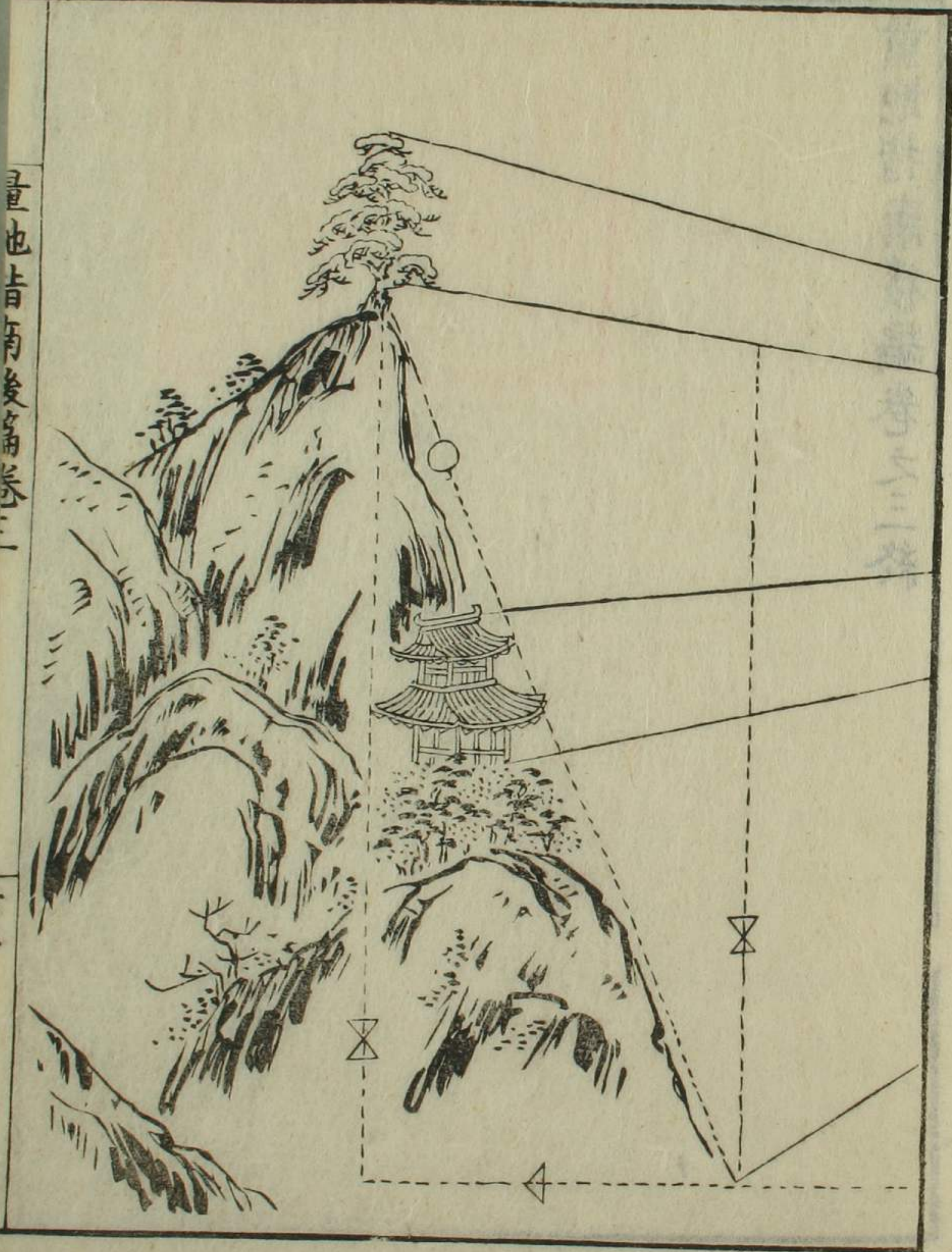
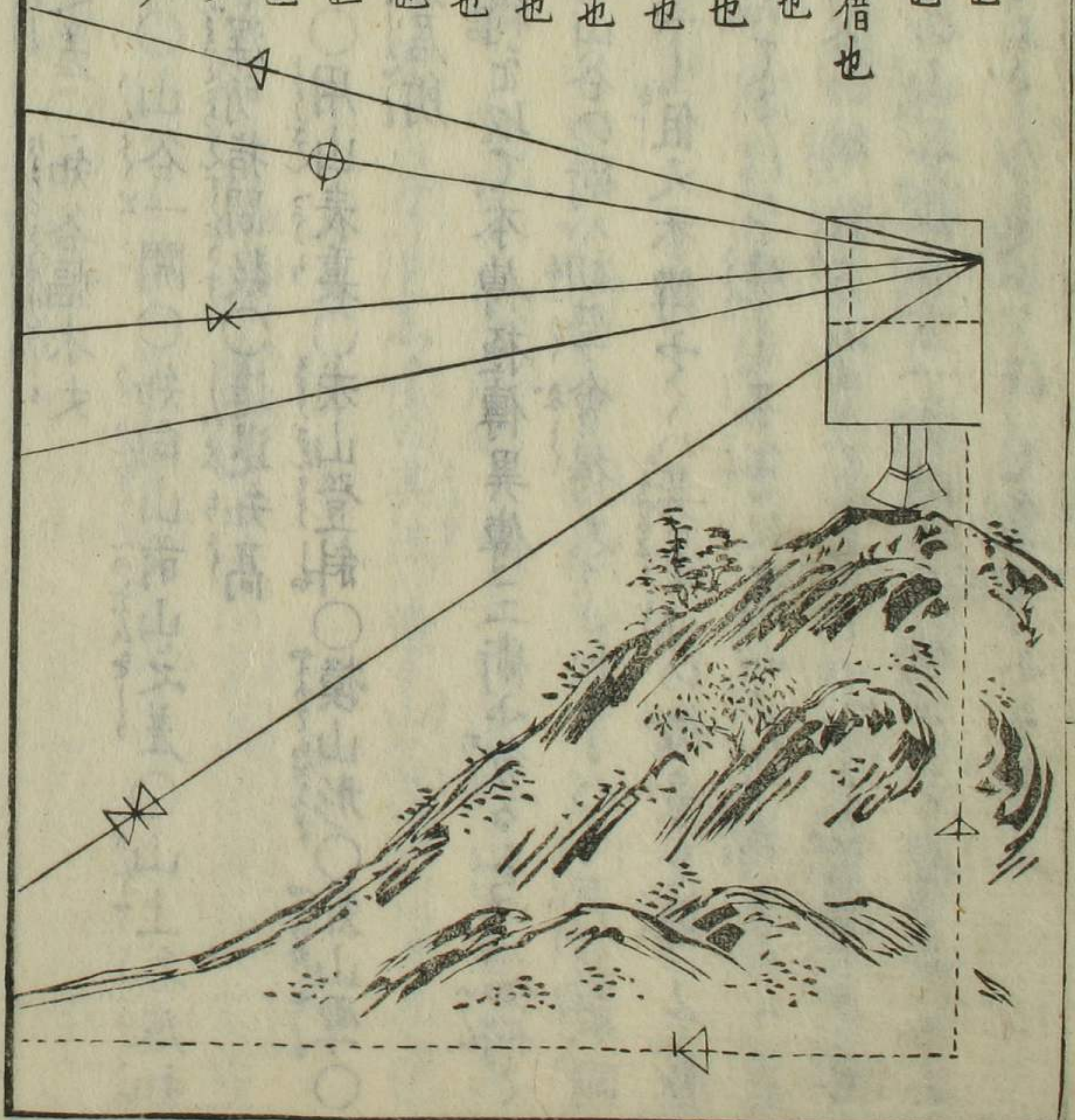
木高 ○谷深所指間數 ○進退知高

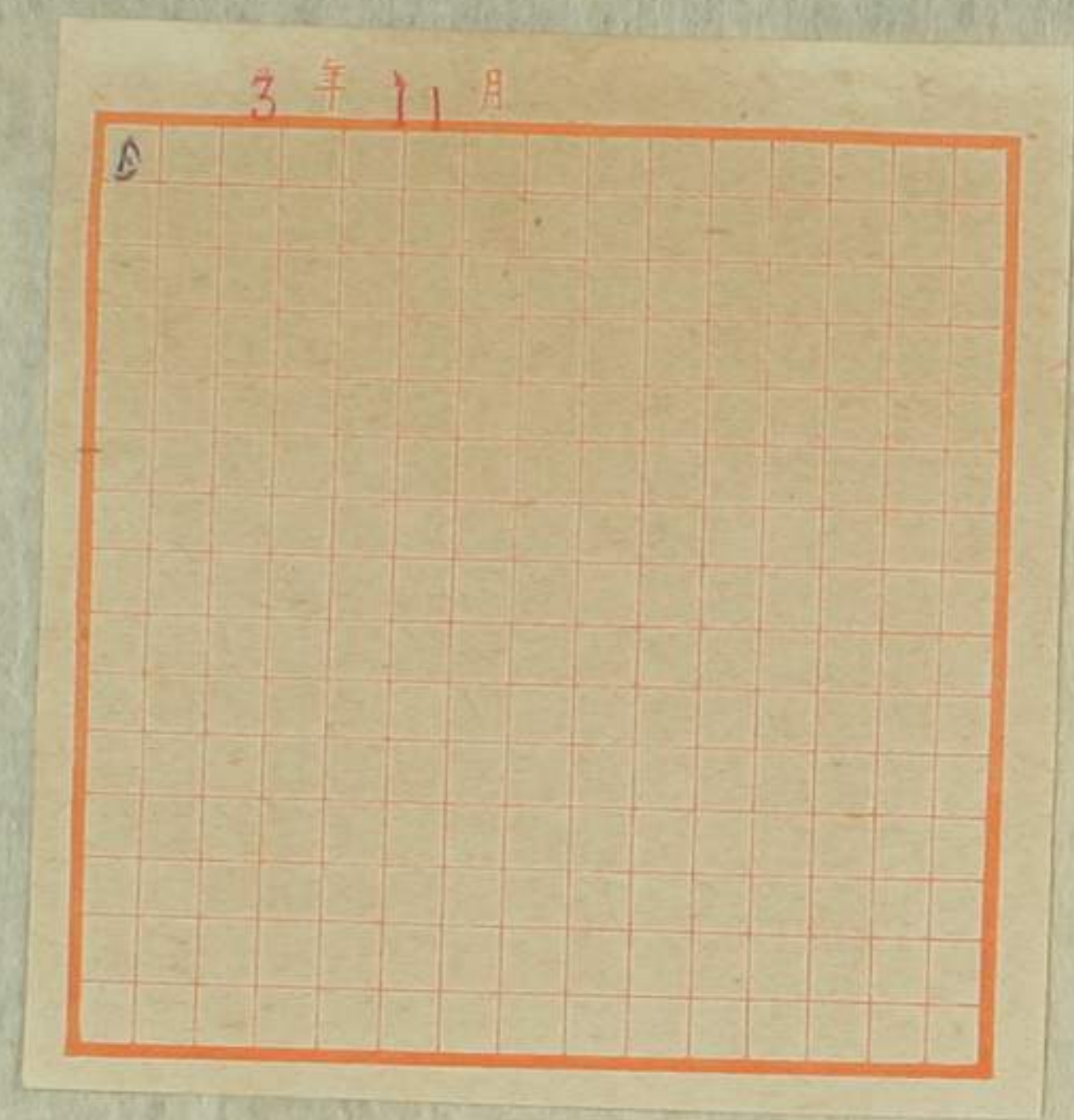
異傳云 ○用山表裏 ○求山登斜 ○摸山形 ○知山厚 ○

天守櫓知居所

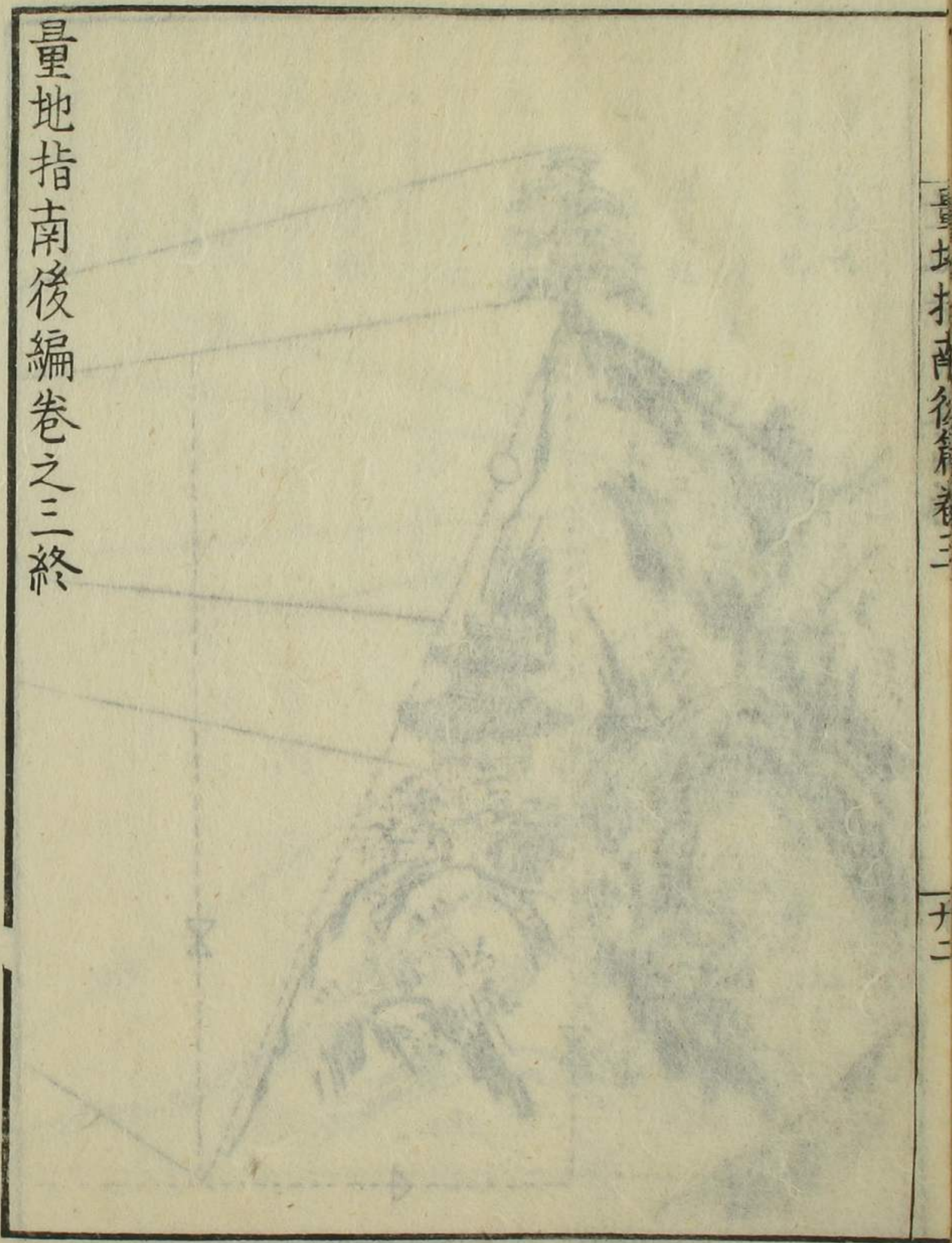
右山谷の教術を以て本傳極傳異傳三術に分るもの如何と察する。都て山谷の術ハ初學會得てこれよりつて再往教諭せんがためなり。但し本傳や其量法の微意を隠して極傳におおき。始めてこれを曉し。子弟に高ぶらんが為なる。甚し。右山谷の術教方あるがごとく。一と。皆予が前編小述る所の山谷教知方一術の中に明うなり。是がたり。前編の圖をふくむ。是は是の法で参考ふべきなり。

⊕ 八山頂へ空徑也
 × 八山禁へ空徑也
 二法六種ニシテ假借也
 △ 八山頂ノ樹丈也
 × 八彼山ノ直立也
 △ 八此山ノ直立也
 ○ 八彼山ノ登斜也
 × 八中谷ノ直立也
 △ 八此山ノ地徑也
 × 八彼山ノ地徑也
 × 八此山ノ登斜也
 以上九種凡三種子
 間数ヲ因シ渾發ヲ
 以テ量リ知ルナリ





量地指南後編卷之三終



量地指南後編卷之三

十一

